
黒猫と死にたがりのお嬢様

森ヒスイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒猫と死にたがりのお嬢様

【Nコード】

N3995V

【作者名】

森ヒスイ

【あらすじ】

影から新しく生まれ出たユニには頭に猫耳とお尻に黒いしっぽがついている。名前以外、記憶はない。彼女はどうかやら街でまれに生まれる黒猫という存在らしい。人を楽に死なせてくれる存在で正体不明。ユニと同じ黒猫のノーラが住む屋敷の令嬢フランスカは変わり者で、ユニを家族にむかえようとする。黒猫のユニと死にたがりのフランスカが生と死の時間を過ごす長編ファンタジー小説、現在連載中。

初頁 「ユニ新生」

ユニという名の少女は、いったいどうして暗闇の中を歩いているのか分からなかった。ただ前に向かって歩かなければならない。そんな思いだけがユニの胸に満ちるただ一つの思いだった。

前にも後ろにも天地にも果てしない闇が続いているだけ。周りを見てもユニ以外には誰もいない。それでも恐怖に身をすくませることもなく、ユニは何か背中を押されるようにして闇の海を歩いて行く。いつからこうして歩いているのか、それさえもユニには分からなかった。

歩きに歩いて、ユニは暗黒の中に針の先ほどの光を見つけた。それまで冷たく引き締まっていた胸が温かく緩む。この感覚は……たしか安心感だったとユニは思い出す。ユニは光源に引き寄せられる蛾がのように、白い光に向かってふらふらと歩みよっていく。ユニが近づくとつれて小さな光はだんだん大きくなっていき、目の前が光でいっぱいになるほどに接近した時、それまで闇一色だった景色が一変した。

昏間でも薄暗い階段の影から、ユニが人知れず歩み出す。まずユニの目についたのは真紅の絨毯じゅうたんと、まぶしいほどに白い壁。見たことのない場所だが、それでも理解はできる。ここは人間の家。それも、相当の金持ちの家だ。

続いている感覚は、ユニの身体にまとわりつく生ぬるい空気。暑くも寒くもなかった奇妙な闇の中とは肌への刺激がまったく違う。ユニはすぐにこの空気の方が慣れ親しんでいることを思い出す。

腕をすばやく振ると空気の抵抗を感じる。なかなか面白い。そうして少しだけ遊んでいると、ユニは自分が身体に何一つまとっていないことによく気づく。生まれたばかりのユニの肌は白く、きめ細やかでさらさらとしている。胸はほんのりと膨らんでいて、股にはなにもついていない。自分は女らしかった。

足を上げて指をじっくり見ていると、視界の端に何か映った。なにやら黒くて長い。宙で揺れるそれに手で触れると、鋭い感覚が脳天を貫く。痛みではないが、身体中をいつせいになでられるような過激なくすぐったさ。わけも分からずにユニは手を離し、驚きながらによるによるしたものが何なのかを見極めようとす。くねるにによるによるは自分の尻の上につながっている。これは尻尾だ。自分の身体の一部なのだ。

自分には細かい毛で覆われた黒い尻尾がついている。それを当然のことのように受け入れて、ユニは顔をぺたぺたと触る。側頭部には耳がついていない。その代わりに、頭の上に二つの大きな耳がついている。穴に指を差し込むとこそそというともなく大きな音が頭の中に響くので、ユニはすぐに指を引き抜いた。これは危険な遊びだ。やりすぎると耳を痛めてしまう。

ユニは生まれ出た影から出て館の廊下をゆっくりと歩いていく。素足に触れる絨毯の柔らかさが新鮮だった。

額縁がくぶちに入った絵が飾られた壁や緑色の壺が置かれた机を眺めながら歩いて行くと、ユニは壁にはまった窓ガラスを見つけた。

窓を覗くと、灰色に曇った寒々しい空と、広がる芝しばと、色とりどりの花が植えられた花壇が目に入る。

ガラスにユニの顔が映っていた。肩にかかるほどの長さをした真っ黒な髪。陽光をはね返してうっすらと光る黒髪は癖がついたように先にウェーブがかかっている。ユニは髪の手をつまみ、さらさらとした手触りを確かめる。髪と同じように、ユニの瞳は黒かった。虹彩の中の黒を見つめっていると、さっきまで歩いていた闇を思い出す。自分の身体の内側は暗黒の世界に通じているのだとユニは直感する。

「……………誰が来る！」

廊下の先から届く小さな足音を拾い、ユニの大きな耳がぴくんと跳ねる。こうして言葉を口にするのは生まれて初めてだったが、どう

いうわけか話すことには何の支障もなかった。

「…………裸の黒猫^{くろねこ}…………？ 何だ、見ない顔だなあ。なんで黒猫がこの屋敷にいる？」

「わたしと同じしっぽ。耳もついてる」

ユニの前で立ち止まった女はユニよりもだいぶ背が高かったが、頭の黒髪も猫耳も黒い尻尾もユニといっしょだった。細い身体にぴったりと吸い付くような黒い長そでのシャツと紺色のズボンを着ていて、足には茶色の革靴をはいている。ユニと違って黒い髪は短く、あごにも届かない。凜々しくて、綺麗な顔だ。口に紫煙^{しえん}が漂うタバコをくわえていた。

「見たことのない顔に、全裸の黒猫…………。お前、もしかして生まれただばかりの黒猫？」

ユニはうなずけばいいのかそれとも首を横に振ればいいのか分からずにぼう然と女性の顔を見つめ返す。そんなユニに、若い女性はぼりぼりと頭をかく。

「まあ、いいや。生まれたばっかなのは見れば分かるしね。お前、名前はなんて言うの？」

「名前…………」

そう問われてユニは初めて気がついた。頭の中をいくらさぐってみても自分について何も思い出せない。実感が伴わない知識の群れの中に、ユニという己の名前が燦然^{さんぜん}と輝いているのだけが分かる。まるでその名前が自分の魂にしっかりと刻印^{こくいん}されているようだった。

「……ユニ。わたしの名前は、ユニです」

「ユニね。あたしはノーラ。ま、よろしく」

ノーラという名前の女性がニツと笑い、ユニの左手を掴む。「こっちはおいで」「とぶつきらぼうに言って、裸のユニを引っぱっていく。

「あ の つ。どこへ行くんですか？」

「ユニに服を着せてあげるんだよ。いつまでも裸のままじゃいられないだろう？」

そうだった。この世界では服を着るのが当たり前なのだ。誰に教えられたわけでもないのに、ユニはそのことを思い出す。それでも裸のままでも羞恥心しゆうしんは覚えない。

「ユニ。あなた、生まれる前のことを何か覚えてる？」

「……いいえ。何も思い出せません」

「そうかあ。あたし達黒猫は、運が良ければ前世の記憶があるものなんだけどね」

あたし達黒猫。前世の記憶。ズボンの穴から生えているノーラの黒い尻尾を見ながら、ユニは頭にたくさんの疑問符を生じさせた。

「また街に黒猫が増えるとなると、お嬢じょうは喜ぶだろうけどベスの奴は怒るだろうなあ」

ノーラはそんなことをつぶやきながら、ドアを乱暴にノックする。
「ベス！ おーい、ベス！ ちょっと服を用意してくれ！」と大声
でドアに向かって叫ぶ。ユニの優れた聴覚は、ドアの向こうの空間
で何かが動くのを確かに聴き取った。

「ご用ですか、ノーラさん」

引かれたドアから顔を出したのはまたもや若い大人の女性だった。
しかし、彼女の頭には耳はついていないし、尻尾も生えていない。
あごの高さできつちりと切りそろえられた髪は明るい栗色で、目は
青い。ユニやノーラとは似ているようで違う。ユニと違ってベスは
この世界に普遍的に存在する人間だ。

「ベス。この子、どうもこの家で生まれたいらしい。何か服を用意し
てやってくれ」

「新生の黒猫、ですか」

それまで表情を消していたベスの顔に嫌悪の色がにじむ。ベスの冷
たい目ににらまれて、ユニの尻尾はおびえて腰に巻き付いた。
ベスは黒いワンピースの上にフリルのついた白いエプロンを重ね着
していて、黒いストッキングをはいた足に瀟洒しょうしゃな黒い靴くつをはいてい
る。金持ちが雇う、家の雑事を片付けるメイドだ。

「冗談じゃありません。不吉な黒猫はあなた一人で十分ですよ、ノ
ーラさん。目につくだけでも不快です。さっさと追い出して下さい」

「おいおい、生まれたばかりの赤んぼうにずいぶん冷たいじゃない
か、ベス。それに使用人のお前が、旦那だんなのクロフォードとお嬢の許
しもなく勝手に貴重な黒猫を捨てちまってもいいのか？」

ベスはかすかにため息をつく、ユニとノーラを部屋の中に招き入れた。たたみかけの洗濯物が積まれた机のそばで待たされること十数分、ベスは湯が入ったたらいと白いタオル、それに黒い服を持ってユニ達の前に戻ってくる。

湯に浸し、軽くしぼったタオルでユニは全身を丁寧にふいてもらう。ベスはいかかわらずの恐ろしい無表情だったが、手際も力加減も絶妙だった。相当に手慣れているらしい。

肌をなでる温かで湿った感触。そして鼻をくすぐる心地良い花の香り。香油か何かが湯に混ぜてあるらしかった。生まれたてで何もかもが新鮮なユニにとっては、体に押しよせる膨大な情報に圧倒されてくらくらしってしまう。

両腕を上げてわきの下をふいてもらうユニを、ノーラは窓際によりかかりながらぼんやりと眺めている。懐かしいものでも見るような穏やかな目だった。

「お嬢様のお古ふるです。黒猫にはもったいないほどの上物ですが、それしかなかったので仕方ありません。ありがたく思って着て下さい」

「ど、どうもありがとうございます」

ユニはぺこぺこ頭を下げ、手渡された薄ピンクのパンティーをはき、黒いワンピースを被る。まるで予行練習を済ませた後のように、初めてでもてきはきと着ることができた。

「よく似合あつじゃないか。可愛い」

ノーラの感想にユニは首をかしげる。よく似合あつのかそうでないのか、それさえもユニには判断できない。長い尻尾が服の下に押し込まれてしまって窮屈きゆうくつな感じだ。それでも体を揺らすとワンピースの

端がふわりと舞い、ユニ自身も可愛いと思う。

「じゃあユニの身なりも整えたところで、お嬢に顔合わせさせるか」

「いけません。その前に旦那様にお伺いを立てなければ」

ユニの新生は予想外のこと、間に合わせの服は用意できても靴は無理だったらしい。ユニは裸足のままノーラの手に引っぱられ、華美な廊下を進み、書斎の前までやって来た。

重厚なドアをノックしてベスが先に中に入り、中で何やら話し合った後、外で待っていたユニとノーラを書斎の中へ呼び寄せた。

02頁 「親の慈悲心、子ゆえの闇」

部屋に踏み入ったユニを見るやいなや、書斎の奥で黒檀こくたんの机に座っていた紳士が立ち上がる。そして、ゆっくりとユニの前に歩みよってきた。

「生まれただけの黒猫に会うことができるとは光栄だ。私はクロフォード＝ハミルトン。ベスの雇い主で、この家の主だ。ええと、君の名前は……」

「ユニ。ユニです」

クロフォードと名乗る男もまた、メイドのベスと同じように普通の人間だ。黒いスーツに身を包み、年の頃は40歳前後だろう。きちんと整えられた金色の髪に豊かな知性をにじませる穏やかな灰色の目をしていて、全身から品が匂い立っているようだった。生まれたてのユニにも分かる。クロフォードという人間は金持ちで、上流階級の人間だ。

「ベスによれば、ユニはこの家で生まれたそうじゃないか。本当かね？」

「ど、どうもそうみたいなんです……」

「ああ、確かだよ、旦那。素っ裸で廊下をうろついているユニをあたしが見つけたんだ」

「……フランシスカは新しく生まれたユニに会おうとするのだろうか
なあ」

クロフォードはため息をつく、整髪料で綺麗に固められた髪をがりがりとかきむしる。髪が無残に乱れていくのもお構いなした。

「ああっ、ユニっ！ どうしてよりもよって我がハミルトン家で君がっ、黒猫が生まれてしまっっ！？ これでは娘がっ、私の愛しいフランススカが消えてしまっっ！」

病的な発作はつげに見舞われでもしたかのように、クロフォードは「ぐああっ！」と叫び声を上げてごろごろと床の上をのたうち回る。

「だ、だいじょうぶですかっ！？ わたしのせいですかっ？ きっっとそうですよねっ」

「ほっつけよユニ。澄ました旦那でも、お嬢のことになるといつもこうなんだから」

のんびりとタバコを吹かすノーラとおろおろするユニの足元でひとしきり暴れた後、クロフォードは息を切らしながら立ち上がる。暗い情念のオーラを身にまとって見つめてくるクロフォードは幽鬼のようで、ユニは恐ろしさに足がすくむ。

「今やフランススカの望みはたった一つ。黒猫に会うことのみだ。できる限り娘の気持ちをくんでやりたいが、しかし、ユニを会わせるのは……」

「ユニを屋敷から追い出しても無駄だな。どうせ一時ひとときの時間稼ぎにしかない。新生の黒猫は嫌でも目立つからすぐに街で噂になる。情報のお嬢がそれを知るのに3日もかからないだろ。ユニを連れてこいっただだをこねるに決まってる」

「うむむむ……」

クロフォードは書き物がたまった机に腰をかけて頭を抱え、やがて魂が抜け出るかのように大きなため息をついて顔を上げる。この短い時間で十年も年をとってしまったかのようにやつれた印象をユニは受けた。

「ノーラの言うとおりだ。仕方がないな。どうなるかは分からないが、これからユニを娘に会わせよう」

ふらつくクロフォードを先頭にしてユニとノーラが後ろに続く。書斎のドアを開けたところで、部屋の前に控えていたベスと出くわした。

「旦那様。まさか、そのちびの黒猫をお嬢様に？」

「ああ。今から会わせる。もう私がフランススカにしてやれるのはそれぐらいだからな」

自嘲の薄笑じちやういを浮かべるクロフォードに、ベスの表情が厳しくなる。

「旦那様。そのユニという黒猫がお嬢様を殺すかも知れないのですよ？ どうぞお考え直しを」

わけも分からずフランススカの元へ連れて行かれようとしているユニは、殺すという言葉に驚いて耳をぴんと逆立てる。ユニには誰かを殺害する意思などない。不安になつて隣のノーラに視線で問いかけるが、彼女は肩をすくめて見せるだけだ。

「……ここからは私とノーラとユニだけでいい。仕事に戻りたまえ」
深く頭を下げたまま畏まるベスの横を素通りし、クロフォードは廊下の先へ進んでいく。ノーラは当然のように、ユニはどこか申し訳ない気持ちでおずおずとベスの横を抜けてクロフォードについて行く。

ユニが振り返ると、ベスが氷のように極寒の目で自分をにらんでいるのが見えた。ユニはたまらずノーラの服を掴み、身体をすり寄せ

る。
廊下を歩き階段を上がる。重い沈黙と、クロフォードの哀愁を帯びた雰囲気はどうにもいたたまれない。まるで葬式に向かうかのような空いだ。

これから何が起こるのか、フランシスカという人物は一体何なのか、思えば思うほどユニの胸には不安がつのる。元気を失って頭の猫耳を垂れ下からせていると、ユニは廊下の角で誰かがこちらを見ているのが目に入った。

「や、やあ、ダルジャンヌ」

「……………」

曲がり角から半身を出してこちらを覗いている少女。ダルジャンヌという名前らしい彼女にクロフォードがあわてて挨拶しても、少女は無反応だ。口を開くことなく、ただじっとユニ達を見ているだけ。近寄りがたい異様な暗いオーラを放っている。

灰色の短髪に、たくさんの白いフリルがあしらわれた漆黒のゴシック調ドレス。脚をおおうニーソックスと靴まで黒い。何よりもユニの目を奪ったのは、彼女の背中から生えている一對の小さな羽と、その頭の上に浮かぶ光輪だった。ぼんやりと黄色く光る光輪はダルジャンヌの真つ黒な服のせいで闇夜に浮かぶ月のようだ。

何日も眠っていないかのような、あるいは誰一人信用していないような不安と不信に満ちた目でユニを見つめている。底知れない闇をたたえた赤紫色の瞳はダルジャンヌの内面を完全に隠しているが、ユニやノーラののような黒猫と同じように彼女が人間でないことだけはすぐに分かった。

「ユニ。ダルとあまり目を合わせるな。あいつ、色々やばいから」

小声でそう注意するノーラに、ユニは恐いもの見たさで後ろを振り返ってしまう。廊下の先へ進んでいくユニ達を、ダルジャンヌは壁に半身を隠したままの姿勢ですっと見ていた。それも、ユニだけを見つめている。ユニはびっくりして、ワンピースの下の尻尾がぴんと伸びてしまった。

ダルジャンヌがひそんでいた場所から十分に離れた時点で、ユニは思い切ってクロフォードに顔を向ける。

「ダルジャンヌさんって、何者なんですか？」

「フランシスカが趣味で館に住まわせている子だよ。普段は部屋にこもっているのに、今日はめずらしく部屋の外に出ていたな……」

「新しく生まれたユニの気配に誘われたんじゃない？」

「ユニ。ダルジャンヌの存在は屋敷の住人以外には誰にもしゃべってはいけないよ」

そうユニに念を押しすぎ、クロフォードもノーラも口をつぐんでしまう。ダルジャンヌのまもっていた雰囲気は伝染でもしたかのようになり、さきほどよりもいっそう三人の間の空気が重苦しくなる。

禁忌の少女ダルジャンヌ。その正体は不明であり、存在を口に出す

ことさえはばかられる。彼女はハミルトン家の抱えるタブー。ダルジャンヌの病んだ目を思い出してユニの背筋は凍えたが、クロフォードとの約束はちゃんと守ろうと心に誓った。

「ここが娘の部屋だ」

たどりついたドアの前でクロフォードは深呼吸をくり返す。娘の部屋に入るだけなのにどうしてもそんなに緊張しているのか、ユニには理解できなかった。

「……フランシスカ……。私だ。ちょっといいかい？」

「……何か用？ お父様。用があるなら手短かに話して」

ドアの向こうから届く女の子の声。その声は冷たく乾いていて、クロフォードへの興味の無さがありありとにじんんでいる。愛情の反対は嫌悪ではなく、完全なる無関心だ。

「今日、この家で新しく黒猫が生まれたんだ。名前はユニ。ノーラといっしょにここにいるんだが、会ってみるかい？」

「すぐに通して。ありがとうお父様、好きよ」

フランシスカ嬢の感謝の言葉は歓喜に満ちていて、それを聞くユニの心まですずんでしまう。

娘の言葉に、クロフォードは嬉しさと悲しさを混ぜたような顔でたずんでいる。娘と話せるのはありがたいが、黒猫を会わせてしまうことへの葛藤かっとうにさいなまれているらしい。

「どうしたの？ 早くユニって子に会わせて」

石像のように固まっているクロフォードの代わりにノーラがドアノブを回し、それと同時にユニの手を引く。

「ユニとノーラだけでいいわ。お父様は入らないで」

フランシスカのドライな声に、クロフォードはドアを前で陸に打ち上げられた魚のようにぱくぱくと口を開いたり閉じたりしている。ノーラがさつさとドアを閉めてしまったので、クロフォードはフランシスカの視界からすぐに遮断された。

「初めまして、ユニ。まあ、小さくて可愛らしい黒猫。こっちに來てもらえるかしら。私は歩けないから」

「は、はいっ」

白くて清潔な壁に、曇り空の薄明かりが差す窓。何も無いがらんとした部屋の中に設えられたキングサイズのベッドの上に、フランシスカという名の少女が横たわっていた。

深窓の令嬢フランシスカ。さらさらとした美しい金の長髪に、灰色の瞳。年は10代前半程度。よく整った顔をしているが、かなり痩せている。肌も病的に白い。何かの理由で健康でないことは一目で分かった。窓から見える空の雲を思わせる灰色のパジャマを着ていて、手足は枯れ木のように細い。

「この家で生まれたんですって？　すごいわ。運命的ね。ついに私の念願の黒猫が来てくれたのかしら」

「あのう、お聞きしたいんですが、黒猫って何なんですか？　わたし、本当に黒猫なんですか？」

自信なさげなユニの目を見て、ベッドから上半身を起こしたフランシスカはきよんとする。その後には薄笑いを浮かべながら、ドアのそばに控えているノーラに目を向ける。

「ねえノーラ。生まれたばかりの黒猫はそんなことも忘れていないの？」

「前世の記憶がある奴はいいけど、それ以外の生まれたばかりの黒猫は阿呆あほうだよ。頭の中はほとんど白紙状態だ」

「そう。まあいいわ。私は黒猫については知り尽くしているの。だから黒猫のことを教えてあげる。

まず黒猫は私達人間とは違う。別の生き物よ。頭の耳とお尻の尻尾を見れば分かるでしょう？ あなたの頭の耳と尻尾が黒猫である証あかし」

ユニは反射的に頭に触れて猫耳を握る。こんな巨大でびくびく動く耳も、細かな毛で覆われた尻尾も、ベスやクロフォードやフランシスカにはついていない。それに、黒い髪や目もユニが見てきた人間達とは異質だ。

「黒猫がどうしてこの世に生まれてくるのかは誰にも分からない。仮説はいくつもあるけれど、どれも疑わしいものばかり。黒猫についてはずきり分かっていることは、人間を楽に死なせてくれるという」と

「楽に、死なせてくれる？」

「そう。人が頼めば、黒猫は死にたい人間を天に連れていつてくれるの。いつさい苦しみが伴わない、慈悲深い死。死体も服も何も残らないの。黒猫はそういう能力をもっている。ユニにもその力があるわ。私がユニに死なせてと頼めばユニは私を殺せるはずよ」

ユニは不思議な気持ちで自分の小さな手を見つめる。この非力な手がどうやって人を殺すというのだろうか。ハミルトン家に生まれる前もどこかで黒猫をやっていて、頼まれるがままにたくさんの人を天に連れて行っていたのだろうか。

「この街の名前はメメントモリ。ほんの少しの黒猫が住んでいる人の街よ。黒猫は天の使いと信じられているから人々に愛されているし、逆に畏^{おそ}れられてもいる。人の死にまつわる存在だから恐がられても仕方がないけれど。私は黒猫って好きよ。可愛らしいし、能力も魅力的」

フランシスカはユニとノーラを見て軽く笑うが、少し話したただけもう息が切れてきている。額にも汗が浮かび、見るからに辛そうだ。

「大丈夫ですか？ どこか具合が悪いんですか？」

「ああ、心配しなくても大丈夫よ。どうせそのうち死ぬから」

笑い飛ばすフランシスカの目に宿るのは、死への恐怖ではなく、純粹な諦観^{ていかん}。彼女はもう己の死すべき運命を受け入れてしまっている。身近な死にすっかり憑^つかれてしまっている。

「生まれつき胸が悪くてね。小さなころからだんだん悪化して、いつ死んでもおかしくない状態なの。もう恐がるのにも、泣くのも飽きたの。死ぬのは恐くないわ。べつにいつこの世から消えても良い

の。黒猫に殺してほしい。それが私に残った、ただ一つの生きる理由よ」

理想の死に方を求めるために、今にも消えてしまいそうな命をつなぎ止めている。フランシスカがどうしてそんなことをするのか、生まれたてのユニには理解できない。それに、黒猫ならすぐそばにノーラがいる。ユニは首をひねって後ろのノーラを見ると、「ノーラはノーラでいいのだけれど」というフランシスカの言葉で顔の向きを元に戻す。

「私は黒猫が好きよ。だからノーラをこのハミルトン家に置いているの。黒猫は街の共有財産だから個人が独占するのはいけないことだけれど、お父様が何とかしてくれた。お父様は金持ちで、一応の名士だから」

「ま、ここは良い家で住みやすいし、食事も美味しいからあたしに不満はないけど」

「そうそう、ユニ、ダルジャンヌには会った？ 背中手のひら位の羽がついてて、頭に光るわっかが浮かんでいる女の子……」

ユニが恐る恐るうなずくと、フランシスカはけらけらと笑う。

「あの子も私のお気に入りなのよ。ほら、ダルジャンヌってけっこうイカれてるでしょう？ 私と同じみたいで面白いのよ」

あのダルジャンヌをそばに置いて養って、いったい何が楽しいのかユニには分からない。対人経験がほぼゼロのユニでも、このフランシスカという少女が人間の平均的な価値観からいちぢるしく逸脱した精神の持ち主であることがうかがえる。

「ユニ。あなたに興味があるわ。新生の黒猫のあなたにね。このまま病気に殺されるのは御免ごめんだけれど、自分の意志で自分の生に幕を下ろせるのなら満足なのよ。でも、黒猫なら誰でもいいわけじゃない。私は黒猫に、私を殺す資格を求めるの」

「殺す、資格ですか……？」

「つまらない黒猫、何の美学も哲学ももっていないどうでもいい黒猫に命を差し出したいとは思わないの。だってそうでしょう。どうせ命を持って行かれるのなら、好ましい相手がいいじゃない。この街の黒猫は全滅。ノーラは惜しかったけれど、殺されたいと思う黒猫は一人もいなかった。だから、街に新しく生まれたユニに期待しているの」

真摯しんじな目で見つめられる。ユニは少し緊張し、それまで風に揺られるようにゆっくりと動いていた尻尾もぴんと下に向かって伸びてしまっ

こういう目にユニはおぼえがあった。前世の記憶は飛んでしまっているが、たしかに自分はたくさんのこういう目と向き合って生きていた。魂に深く刻まれた感覚は忘れたくても忘れられない。この世には生を謳歌おほいかする人間がいるように、狂うことなく真剣に自分の死と向き合う人間もいるのだ。

「わたし、フランシスカさんに何かしてあげたいと思います。ベスさんに身体をふいてもらっ

たし、こんな綺麗な服ももらっ

たし。この黒い服って、フランシスカさんのものらしいですね」

「ふうん……。上出来ね。ちゃんと自分というものを持っている。あなた、なかなか見どころがある黒猫だわ」

ユニのどこを気に入ったのか、フランシスカはにやにやと笑う。そして、手をぱんと打ち鳴らす。

「決めたわ。今日からユニはうちの子よ。ユニはもともとこの家で生まれたんだし、それがいいわ」

その時、部屋のドアが勢いよく開けられた。どうもドアの向こう側にはりついて聞き耳を立てていたらしいクロフォードが、フランシスカの白い城にあわてて踏み入る。

「フランシスカ！ ほ、本気なのかい？ 黒猫のユニを迎えるというのは……」

「ええ。この子が気に入ったの。それよりノックもせず勝手にレディーの部屋に押し入って不愉快よ、お父様」

汚物を見るかのようなフランシスカの目にクロフォードは一瞬ひるんだが、そらしかけた顔を正面に戻す。なにしろ今は非常事態だ。愛する娘に死をもたらしかねない黒猫が屋敷の住人となって、良い影響があるうはずもない。

「し、しかし、もうノーラもいるし、ダルジャン又だっているじゃないか。友達は二人で十分だろう？ それに、ノーラに続いてまた街の黒猫を独り占めしたとなれば私への風当たりがいっそうきつく……」

「お父様。私はいつ死ぬか分からない。だから残されたわずかな時間を後悔しないように生きたいのだけれど、それでもユニを捨てるとおっしゃるの？」

後半の心にもない言い訳を一蹴され、もはやクロフォードは何も口に出せなくなつた。

「ユニ。お父様はこころよく認めて下さつたわ。今日からここがユニの家よ。あなたはとっても運が良いわ。普通なら街で生まれた黒猫は自分の力で生きていかなければならないのだから。生まれたばかりの黒猫は苦勞するのが常なのよ」

「ただで置いてもらうなんて、そんなのいけません。何かお手伝いします。お掃除でも、ごみ出しでも、何でもします」

耳を逆立てて息巻くユニに、フランシスカはどこかあきれたような顔をする。何も分かっていないといいたげだつた。

「そんなの、メイドのベスに任せればいいじゃない。特別で稀少な黒猫がわざわざやることじゃないわ。実際、ノーラもダルジャンヌも何もしてないし、あなたもわざわざ働くことなんてないわよ。ここに住んで、たまに私とお話してくれるだけでいいの」

「いえ、どうか働かせて下さい！」

「変な黒猫だなあ。わけが分からない。自分から働きたがるなんて頭を下げるユニの後ろで、ノーラがとあくびを漏らしながらやる気のない声を出す。

「そこまで言うならベスの手伝いなんかしてみたらどうかしら？
メイドの黒猫なんて可笑しいし、聞いたこともないけれど、見てみたい気もするし」

ユニの顔がぱあつと明るくなる。名前をもち、住み家を持ち、職を得る。これで自分は一人前だ。黒猫としては半人前以下なのかもしれないが……。

「ただし、ベスは大の黒猫嫌いだから覚悟が要るわ。それは憶えておいて」

ベスの攻撃的な視線と言葉を思い出し、ユニの耳がしょぼんと垂れ下がった。

「何度も言ったはずです。もっと丁寧に、隅々までみがくのです。指先に心をこめるのです。まったく、物覚えの悪い黒猫ですね」

「う、ごめんなさい……」

いつそ眉の端をつり上げたり語気を荒げてくれれば分かりやすいのだが、ベスは表情を消したまま無情な言葉を淡々と投げつけるだけだ。心の内が読めない分、余計に恐い。

階段の手すりを濡れぞうきんでふいていたところをユニはベスに見つかり、仕事の雑さをとがめられていた。ユニは丁寧に頭を下げ、ベスにも自分の仕事があるので説教は長く続かなかった。最後にユニをひとにらみして、ベスは階段の踊り場から去っていく。

ベスの後ろ姿を見送りながら彼女は鋼鉄か何かで出来ているんじゃないかとユニは考える。人間でない黒猫のユニよりもよほど非人間的。あまりに隙がなさすぎる。てきぱきと完璧に仕事をこなしていく様は、まるでそのために生み出された専用道具のようだ。

メメントモリの街にある豪邸のハミルトン家に生まれてから3日。本能とでも表現すべきなのか、人の世でちゃんと生きていくための常識や言語は知識として生まれもっていた。それでも知識はしょせん知識だ。数ある知識に生まれたばかりの身体や意識がついて行けず、ドジばかりをしてしまう。

またベスに怒られてユニは少し落ちこんだが、手を動かせばそれにつられて心も走り出すものだ。ユニは額に浮かぶ汗の玉を服の袖でぬぐい、黒く汚れたぞうきんを水を張ったおけですすぐ。

今のユニの服はフランシスカのお下がりでなく、ユニの身の丈に合わせて用意されたメイド服だった。黒いワンピースの上にエプロンドレスを重ね着し、お尻の尻尾も外に出せるように穴がついている。やはり長い尻尾を自由に動かせると調子がいい。しっかりとした作りの黒い靴ももらい、頭には猫耳の邪魔にならない程度のフリルがついたカチューシャをつけている。

ただの仕事着だが、その可愛らしいでたちをユニはとても気に入っていた。メイド見習いとして屋敷の掃除をする合間に窓ガラスを鏡代わりにし、頭のフリルや背中では結ばれたエプロンストラップの大きなリボンに見ほれてしまう。

「頑張るねえ、ユニ。すぐに飽きて、投げ出すかと思ってたのにさ」

「ノーラさん」

階段の上にノーラがいた。手すりに胸と両腕を預け、火のついていないタバコを左手で器用にもてあそんでいる。尻尾もだらんと垂れ下がっていて、見るからにやる気がなさそうだ。

「変わった黒猫だよ、本当に。普通、あたし達黒猫はもつとさばさばしてるんだよ。無意味に人間には関わらない。それなのにお嬢のためにただ働きするなんて」

「だめですか？ こんな生き方じゃ、わたし黒猫失格ですか？」

「いや。どう生きようが、その黒猫の自由だからね。ユニの好きなようにやったらいいさ」

ふふんと笑うノーラに、ユニも肩の力が抜けてしまふ。朝から階段の手すりと格闘していた疲れもあって、ユニは階段の上に腰を下ろした。

「ノーラさん。わたし達黒猫って、何のためにいるんでしょう？」

「さあ。人間を楽に死なせる力をもってはいるけれど、そもそもその意味が解明されていないんだ。天に連れていった人間がどうなるのか、案内人の黒猫自身にも分からない。確実に天国へ行けると人間の間では信じられてはいるけれど、黒猫にも分からないんだ。昇あが天うてんした人間の最後なんか、誰にも分からない」

「ノーラさんも、人間を天に送ったんですか？」

「うん。ここに住むことになる前は、それなりの数をこなしたよ」

ユニは不安な気持ちで上に立っているノーラを見上げるが、彼女はそれまで通りぼけつと向かいの壁を見ているだけだ。

「どうでした？ 何か感じましたか……？ 恐いとか、悲しいとか」

「いいや？　べつに普通だったよ。黒猫にとっては生きるための仕事だよ。楽しいも悲しいもないさ」

「生きるための仕事」

人を殺すことがどうして黒猫の仕事なのだろう。頭に浮かんだ疑問をユニが口に出すよりも先に、ノーラが話を続けた。

「黒猫の掟おきてに」人間が死ぬように自分から促してはいけない」というのがあってね。いくら仕事といっても、黒猫側から人を殺すように働きかけてはいけない決まりなんだ。お嬢が死にたがっていても、ユニの方からわたしの能力で死にませんか？なんて聞いてちゃいけない。あたし達黒猫はあくまで人間の頼みを聞くだけさ。ちゃんと憶えておくんだよ」

ノーラは「邪魔したね」と言い残し、階段を上がって行ってしまった。ユニは休憩を終え、手すりみがきを再開した。

黒猫は人を天に連れていく。だが黒猫の掟に従っている限り、黒猫の意思で人を殺すことはできない。だから黒猫は人間の街で暮らしていけるのだ。死なせてほしいと頼まない限り黒猫は何もせず、ただそこにいるだけの無害な存在なのだ。クロフォードとベスがユニの同居をしづぶ認めたのも黒猫の掟のためだろう。たしかにユニはフランシスカを死なせてしまう可能性があるが、最終的な決定権は人間のフランシスカが握っている。黒猫という死の爆弾は、人間が火種を与えない限り爆発することはない。

そんなことを考えながら手すりをみがきあげ、ユニは心地よい達成感を胸にクロフォードの書斎を目指す。

ドアをきちんとノックし、クロフォードの入室の許可をとってから中に入る。

「何か用事かい？ ユニ。困ったことがあったのかい」

「お部屋の掃除をしようと思ひまして」

「そうか、掃除か……。うん、助かるよ……」

ほうきとちりとりを両手に現れたユニに、クロフォードはどこか困ったような苦笑いを浮かべる。

クロフォードは種類の書類が並べられた机と向かい合い、ペンを片手に書き物の最中だ。仕事中に部屋をうるうるされては大切な集中力を殺そがれてしまうのだが、そんなことはユニは分かっている。正しいメイドとは、雇い主に不自由を感じさせない仕事人。家の中に主人の仕事場があるのなら、主人が使っていない時にきちんと掃除と整頓を済ませるのが定石だ。その基本さえ見習いメイドのユニは知らなかった。

堂々と床の掃き掃除を始めたユニに、クロフォードはかすかにため息をついて椅子に深く背中を預けた。この際に手を休めることにしたらしい。

「クロフォードさん。フランススカさんと上手くいっていないようですね」

「うん……。？ う、ううむ……」

「どうしてですか？」

人と接した経験が浅いユニには感情の機微きびがまだつかめない。他人が安易に触れてはいけない問題の領域にもあつさり踏みこんでしまふ。

「……娘がまだ小さい頃に妻に先立たれてね。私も仕事が忙しく、フランススカの世話は使用人に任せきりだった。あの子は家族というものにほとんど触れていないんだよ。フランススカが長く生きられないと知っていれば、仕事など放っておいてもつと構ってやるべきだった。全て、私が悪かった」

クロフォードは沈んだ表情で、組んだ両手の上にあごを乗せる。そんな彼に、ユニはフローリングを掃いていた手を止めて首をかしげる。尻尾もくねった形のままで固まっていた。自分は何かいけないことを訊きいてしまったのだろうか？ 胸にわき上がる悪い予感に、ユニは今さらになって不安になってきた。

「ごめんなさい。わたし、また何かドジをやってしまったんでしょうか」

「いや。ユニはよくやってくれているよ。賓人まれびとの黒猫が自分から人の家に住んでくれるだけでもありがたいのに、その上ベスの手伝いまでしてくれている。君が生まれてから、フランススカがよく笑うようになった」

クロフォードの遠い目は、別の部屋でベッドにとらわれているフランススカに思いをさせているのかもしれない。同じ家に住む父と娘の間柄だというのに、二人の間の距離ははてしなく広い。

「フランススカは私を嫌っている。無理もない。ほとんど関わっていないのだからね。いくら美しい服や宝石を買い与えても、余命を延ばすことはできない。フランススカはもう楽に死なせてくれる黒猫しか求めていない。私は、どう娘と話せばいいのかが分からないのだ」

「付き合い方が分からないのはフランシスカさんも同じだと思えますよ。今度フランシスカさんにもっと話してみるようにお願いしてあげます」

「ほ、本当かつ!? 頼むっ、ぜひ頼むっ!」

クロフォードは紳士然とした態度を一変させ、ユニの前に飛び出してひざまずき、ユニの小さな手を掴む。ユニは驚いて、猫耳をぴんと逆立てた。

「ノーラはそんなことを口に出さなかった。いや、そもそも私とフランシスカの問題にまったく興味を示さなかった。君は良い黒猫だ。君を家に招き入れて良かった」

感動のあまり涙でぐしゃぐしゃの顔で見上げるクロフォードに、子どもはユニはおろおろしてしまふ。娘と話せるだけでどうしてこれほど喜ばしいのかうまく理解できなかった。

「君の手は温かいな、ユニ。黒猫の手はもつと冷たいと思っていたよ。人に死をもたらす存在などとは思えない」

「あはは。大丈夫ですよ。黒猫は人に頼まれない限り、誰も殺さないんです」

「失礼します。予定通り、黒猫のアルマが館にやって来ました」

ノックをしてそのまま書斎に入ってきたベスに、クロフォードは硬直した。なにしろ彼は少女のユニの前にひざまずき、その手を握って涙を流していたのだから。

クロフォードは「ぬあっ!」と気合いか悲鳴のような奇声を上げて

床の上を転がり、机の陰で顔をぬぐって立ち上がる。

「そうか。アルマが来たか。分かった。報告ご苦労」

きりつとした顔でそう返事するクロフォードにベスはまゆ一つ動かさずに頭を下げ、部屋を出るついでにユニの首をつかんで外まで引きずり出した。書斎の壁に立てかけてあったほうきとちりとりを見て、ここでユニが何をしていたのかを瞬時に読み取ったらしい。

書斎から離れた場所まで引きずられ、クロフォードの仕事の邪魔をしたことと、書斎の管理は経験豊富なベスの仕事であり素人同然のユニには早すぎるとたっぷり説教された。

黒猫のアルマとは何者かを聞こうと思っていたのに、ベスのいじめに近い言葉を頭に打ち込まれ続けるうちに意識からアルマが飛んでしまっていた。

説教を終えて立ち去っていくベスを見送りながら廊下のかたすみでへこんでいると、ユニの優れた五感は何者かの気配を感じとった。

「……………ツッ」

廊下の曲がり角にダルジャンヌがいた。前と同じように、半身を壁に隠したまま、じとつとした目でユニを見ている。三日前に目撃して以来ずっと部屋にこもっていたらしいが、部屋から出てきたのだ。あいかわらぬ黒いドレスに背中小さな羽。頭に浮かぶ満月のごとき光輪。黒猫のユニと同じように、ダルジャンヌも人間ではない。クロフォードもベスもダルジャンヌについてしゃべろうとしない。まるでそんな少女は館にいないとでもいいだけだ。

05頁 「能ある黒猫は爪を隠す」

「……こんにちは。ダルジャンヌさん。わたし、黒猫のユニです。この家で生まれました。仲良くして下さいね」

ハミルトン家で暮らす以上、ダルジャンヌは家族同然。ユニは得体の知らないダルジャンヌを見つめながら笑顔で自己紹介したものの、何も反応が返ってこない。廊下の静寂が重苦しくてならなかった。

「……ダルジャンヌ……」

十数秒をおいて、ぼそりと己の名を口にするダルジャンヌ。どうもそれが彼女にとっての自己紹介らしい。

ノーラいわくダルジャンヌはいろいろやばい。フランシスカいわくダルジャンヌはけっこうイカれてる。具体的になにがやばくてどうイカれてるのかユニには分からなかったが、それでも彼女と親交を深めるために恐る恐る歩みよる。

ダルジャンヌの全身から発せられる暗黒のオーラがまるで物理的な障壁のようにユニの足取りを重くする。ダルジャンヌからユニに向かって強風が吹いているかのようだ。赤紫色の瞳が微動だにせずユニに向けてられているのも心理的な抵抗を誘う。ものすごい女の子だった。心の壁が厚すぎる。

ユニは寿命を削られる思いでダルジャンヌの前までたどり着き、「よろしくね」と笑顔でダルジャンヌの左手を取って両手で握る。異様に体温が低い。明らかに黒猫や人間の体温以下。生命活動が停止した死体が動いているかのようだ。

ダルジャンヌはユニに握られた手をひたと見つめたきり、顔を上げようとしない。また何かドジを踏んでしまったかと思ったユニは急いで彼女の手を離す。すると今度はあの不眠と不信が積み重なった

かのようになくまが浮かんだ目で見つめられる。至近距離で見られるのはキツすぎる。

「じゃ、じゃあ、わたしは仕事があるから。また今度お話ししようね。さようなら」

尻尾を震わせながらにっこり笑い、ユニはそそくさと廊下の先へ歩いて行く。

メイドの心得しんこくについてベスからあれこれ指導された時、ダルジャンヌの部屋には絶対に入るなと強く警告されたことを思い出す。ダルジャンヌの部屋の掃除はベスがやるからユニは決して手を出すなということだ。

普段ダルジャンヌがこもっている、彼女だけ闇の城。いったい中がどうなっているのか、想像もつかない。そこに足を踏み入れる勇氣はユニには無い。ダルジャンヌと向き合っただけがよく分かった。メイドの経験がまったく足りないユニにはクロフォードの書齋やダルジャンヌの部屋は難易度が高すぎる。それを胸に刻みこんだユニはぞうきんを取りにとぼとぼと長い廊下を進む。

階段の手すりみがついていた時のように濡れぞうきんと水おけを用意し、一生懸命窓ガラスをふいていると、ガラスの端に小さな人影が映っているのに気がついた。

「~~~~~ツツツ」

ダルジャンヌだった。遠くからユニの背中を見ている。ユニの後をつけてきたのだ。ユニの尻尾がぞわぞわとした体感で逆立ち、長い髪も猫耳もそれにつられた。

ユニがそろそろと振り返ると、こっちを見つめていたダルジャンヌと視線が衝突する。彼女はつかみ所がない。性格も正体も追ってきた理由も不明で、謎である分恐怖を感じずにはいられない。

「二、これでこの窓はピカピカね。さあ、次に行こう……！」

わざとらしく明るい声を出した後、ユニはぞうきんと水おけを両手に廊下を早足で進む。ダルジャンヌをまくように広い屋敷の中を行ったり来たりして次の窓をみがいてみると、背後に暗い気配を感じとった。

振り返れば、また後ろにダルジャンヌ。完全に追いかけている。まるで真昼の亡霊だ。人間はいるかどうか分からない幽霊を恐れているらしいが、幽霊などよりよほど恐いのは身体をもった人間なのではないかと、この日のユニは直感する。なにしろ人間もダルジャンヌもちゃんとそこにおいて、他人を物理的に殺傷する肉体を持ち、そのための意思をもつこともあるのだから。

ユニがどこへ移動しても、気がつけばいつの間にか背後にダルジャンヌがいる。何のつもりか距離を取りつつ聞いてみても彼女は何も答えない。ただじっと赤紫色の目でユニを見ているだけだ。

化け物が恐ろしいのは、その外見や能力のせいだけではない。言葉が通じず意思疎通ができないことが大きい。相手を理解できないことが恐怖心を増幅するのだ。

逃げるユニと影のように追いつがるダルジャンヌ。そんな不毛な鬼ごっこをくり返していると、ユニは廊下の向こうから歩いてくる人物とはちあわせした。

「初めて見る顔ですね。あなたがフランシスカの言っていた新生の黒猫ユニですか？」

「あなたも黒猫……？」

「ええ。アルマです。どうぞよろしく」

会釈する黒猫に、ユニもあわてて頭を下げた。黒猫のアルマ。ユニには聞き覚えがある。さつきベスが口に出していた名だ。アルマという名の黒猫はユニやノーラと同じように頭に大きな猫耳を生やし、腰の上から黒い尻尾をゆっくりと揺らしている。さらさらとした、背中にとどくほど長い黒髪。綺麗というよりも可愛らしい顔にかけた眼鏡。外見は子どもユニよりも少々年上のようにだった。喪服か何かのような黒い長そでの上着とひざ丈の黒いスカートを着ている。

「私はフランススカの友人で、たまに彼女の部屋にお邪魔させてもらっているんです。まあ、おしゃべりが主な目的です」

「ということは、今日はフランススカさんとお話に来たのですか？」

「はい。彼女から貴女のことをいろいろ聞きました。この館で生まれたそうですね。私は街中で生まれたので街でお店を開いています」

「お店、ですか」

「自分の力で生きるのが好きなのです」

アルマはにっこり笑いながら、ユニの全身をなめるように見る。ユニの衣服はメイド服とはいえ、ユニ用に仕立てられた高級なものだ。それにひきかえアルマの服は安っぽい作りと言わざるを得ない。いわばユニは金持ちの家で何不自由なく養われている飼い猫で、アルマは外で自活していかなければならないノラ猫だった。

「ユニはメメントモリの街に出たことは？」

「いえ、一度もありません。出ない方がいいとみんなが言うので…」

…」

ハミルトン家が新生の黒猫を独占していることは秘密にした方がいい。どうせいつかはばれることだが、それでもユニはなるべく家の中に居て人目を避けた方がいい。ユニはそうクロフォードやベスから何度も言われていた。

「たまには外の空気を吸ってみるのもいいものですよ。こんな派手な屋敷に引きこもっていたら、息が詰まってしまうよ」

外の世界。ユニは窓ガラスを通してしか外を知らない。常に灰色の雲におおわれた空に、グレーの街並み。季節は夏で服が汗で湿る暑さだというのに、メメントモリの街はどこか寒々しい印象だった。

「外に出るときにはぜひ私のお店に寄って下さいね。同じ黒猫としてユニなら歓迎しますよ」

ユニの目を見て笑うアルマに、ユニはどこかふに落ちないものを覚えていた。アルマの物腰は柔らかく言葉づかさも丁寧なのに、なぜかかすかにざらりとした感じを受ける。頭での理解と身体での感覚が食い違っている。人間よりもはるかに優れたユニの第六感が、アルマが異質で危ないと警告しているようだ。

「ではまた会いましょう。ぜひお店に遊びに来て下さいね」

最後にもう一度念を押して、アルマは笑顔のまま廊下の先を歩いて行った。アルマの背中を見送りながら、そういえばダルジャンヌがないとユニは気づいた。ハミルトン家の者ではない客が来ると隠れてしまうのかもしれない。

そんなことを考えていると、廊下の向こうから誰かがやって来た。

この先にはフランシスカの部屋しかない。どうも彼女はフランシスカの様子を見に来たらしい。

「ベスさん。わたし、さっきここでアルマという黒猫に会いました」
「そうですか」

ユニを見もせずになかば無視する形で横を素通りするベスに、ユニはあわてて後ろから声をかける。

「アルマさんって、フランシスカさんの友達みたいですね。わたし、驚いちゃいました」

「友達？ アレが？」

ベスは立ち止まり、つかつかとユニのすぐ前に歩みよる。魂まで凍りつくような冷たい目で見下ろされ、ユニの耳と尻尾がぴんと伸びる。

「アレはお嬢様の友達などではありません。お嬢様の命をつけ狙う、卑しい殺し屋です」

「ころ、しゃ……？」

「殺し屋といっても自殺代行業者ですが。本来、黒猫は自分から人間に死を決意させることは禁じ手のはずです。それなのにアレは友人をよそおってお嬢様と接触し、遠回しに自分の力で死ぬようにしつつこく訴えかけている。お嬢様の命の莫大な価値を欲しているのです。今日の来訪は悪質な営業であり、非法ギリギリです」

「そ、そんなに悪い黒猫には見えなかったような……」

「馬鹿ですね、あなたは。憶えておきなさい。裏表がない人間など一人もいません。黒猫も同じです」

この冷徹なベスにも、知られざる裏の顔があるのだろうか？ 「お嬢様の具合が気にかかるので失礼します」と言ってフランシスカの白亜の城を目指して歩くベスを見送りながら、ユニはもやもやとしたものを胸に抱えていた。

その日の夜、フランシスカの容態ようたいが悪化した。高熱を出し、息は切れ切れで、ベッドの上でうなされている。

クロフォードはフランシスカの部屋の前の廊下を落ち着き無く行ったり来たりしている。ダルジャンヌは見かけない。部屋にこもっているらしい。ユニとノーラは部屋の前にたたずんだきり、看病にせわしなくかけまわるベスを見ていることしかできない。

「……まさか、昼間のアルマって黒猫がフランシスカさんの命を……」

06頁 「深い川は静かに流れる」

「いや。あり得ないよ。時間をかけてじわじわと苦しめることなんかできない。黒猫が人間を殺すときは苦しむ間もなく一発だ。首をばっさり落とすみたいだに」

ノーラは壁に背中を預け、のんびりタバコを吹かしている。ノーラは慌てず、騒がず、落ち着いている。どうもフランシスカの病弱ぶりには相当に慣れていらしい。

「おおかた、アルマの奴とたくさん話して疲れたんだろう。疲れが身体にはね返ってきたのさ」

「だ、大丈夫ですよ？ フランシスカさん、助かりますよね？」

「生き残るときは生き残る。死ぬときは死ぬ。ただそれだけさ。お嬢はいつ死んでもおかしくない身体だよ。今夜が最後って可能性も十分ある」

「……もしも最後だったら、ノーラさんはどうするんですか……？」

「死なせてほしいと頼まれればすぐに天に送ってやるさ。普通に死ぬのと違って痛みが無いから楽だろうし、この家には長く世話になったしね。せめてものお礼。まあ、お嬢の性格上、あたしに頼むのは99%あり得ないけど。あの子は気に入らない黒猫に殺してもらうくらいなら、苦しんで死んだ方がましって考える人間なんだ」

死の苦痛よりも自らの信念に殉^{じゆん}ずる。フランシスカとはまだたった3日の付き合いで話したことも数回程度だが、きつと彼女はノーラ

の言つ通りにするだろうなとユニも感じていた。
部屋のドアが開き、暗い面持ちのベスが出てくる。

「……お嬢様が、ユニに来てほしいそうです」

ユニはとまどつてベスやノーラやクロフォードに視線の先を往復させる。クロフォードは口を大きく開いたまま、彫像のように固まっていた。

「大丈夫です、旦那様。何度もお嬢様に確認しました。黒猫の力で死ぬつもりはないそうです。ユニの力が使われることはありません」

全身硬直から解けたクロフォードの横を通り、ユニは固い表情でフランシスカの部屋に入った。

フランシスカはいつものようにベッドに仰向けになり、赤い顔で目を閉じている。呼吸の間隔が異常に短い。

「ありがとう。ユニ。退屈だろうけど、ユニにそこにおいてほしいの」

「は、はいっ」

フランシスカの声は細く、弱々しい。まるで消える寸前の蠟燭の灯火だ。ユニはそわそわし、ベッドの横に立ったまま尻尾の先を痛いほどに握りしめる。

ベスはまくら元に置いた椅子に腰かけ、真剣な目でフランシスカの顔を見つめている。手に水で冷やしたタオルを持ち、フランシスカの顔の汗をぬぐっている。額にのせた濡れタオルを一定の時間で冷たいタオルに代え続けている。

こんなベスをユニは今まで見たことがない。ベスというメイドはいつも冷静沈着で、温かな血が通っていない鋼鉄で出来ているような

女のはず。それなのにこの必死な雰囲気は何なのだろう。ベスのこめかみから次々と汗が流れ、ほおを涙のようにつたい、あごからエプロンにしたたり落ちていく。死なせたくないという気持ちで鬼気迫る空気となつて、ベスの全身から発せられている。

部屋の窓は全開になつていたが、今夜は熱帯夜とよべるほどに蒸し暑い。そのせいでフランススカの寝間着は汗を吸って湿つていた。それに気づいていたベスは頃合いを見はからつて部屋を出て、着替えとタオル、そして湯を張つたおけを用意して戻ってきた。

「お嬢様。身体をふいて、お召し物を代えましょう」

「ベス。ユニと二人きりにしてほしいわ」

「お、お嬢様？ まさか、黒猫の力を……」

「さあ。先のごことは、分からないわ……」

意味深なことを言つて薄く笑うフランススカに、ベスは瞳を揺らす。そうして少しの間沈黙し、そつとフランススカの手を握る。

「お嬢様。どうか生きて下さい。それがこのベスの唯一の願いです」

ベスは椅子から立ち上がり、深く一礼する。そしてフランススカの望みの通り、静かに部屋から出て行った。

ユニは不安な思いでベスの背中を見送り、それまでベスが座っていた椅子に座る。椅子が温かい。ベスの体温が残っている。冷たい性格のベスにも、ちゃんと温かい血が通っている証拠だった。

「朝、目を覚ますと、私の世界がまわりだす。何かをしようと思つて、思い通りにできる日もあるし、具合が悪くてできない日もある」

フランスカはぼんやりと天井を見ながら、うわごとのようにそんなことを言っている。生まれたばかりのユニには、彼女が何を言っているのかさっぱり分からない。

「そして太陽が沈んで夜になる。眠くなって、私は目を閉じて眠るの。多分、死とは眠っている時のようなものだと思うの。意識が途切れて、暗闇の中に入って、もうそこから出て来られない。眠りは時間が経てば暗闇から目覚めるけれど、死はもう決して目覚めない意識は消えて、身体は腐る。そして私は眠ったまま死ぬことになるかもしれない。生きたまま朝を迎えられたら、命に感謝する。そういうことを考えながら、私は毎日を過ごしてきたの」

フランスカはそこまで途切れ途切れに話すと、ふっと小さく笑う。

「ごめんなさいね、ユニ。いつもは死など恐くはないのだけれど、体調が崩れるとどうにも弱気になってしまう。ただの独り言よ。気にしないで」

「……あの、わたしと二人になる前に、ベスさんに着替えをさせてもらった方がいいんじゃないでしょうか。ここにお湯が用意してありますし、フランスカさん、かなり汗をかいていますし」

「何言ってるのよ。あなたがやるのよ、ユニ。身体をふいて、着替えさせて」

「ええっ!?!」

おろおろと視線をさまよわせて耳をびくびくと動かすユニに、フランスカは意地悪く笑う。

「さあ、脱がせて。早くしないと湯が冷めてしまっわ」

「でも、わたしそんなことやったことないですし！ フランシスカさんに何かしてしまったら大変だし！」

「大丈夫よ。壊れ物の皿じゃないんだから、そう簡単に人間は死なないわ」

フランシスカは目を閉じたまま、頑としてユニの抗議を聞き入れようとしない。観念したユニはフランシスカの服に恐る恐る手を伸ばす。

ただたどしい手つきで寝間着のボタンを外し、胸と腹をはだけさせた。夜空の月のように白い肌。病的な白さの皮膚にはつきりと浮かんだあばら骨。痩せてへこんだ腹と小ぶりな胸。それらを目の当たりにし、ユニは息を呑む。

病床の虜とらとなつているフランシスカの身体は痩せすぎていて、容易に死を連想させる。いつ死んでもおかしくない身体というノーラの言葉がユニの脳裏に蘇る。ユニは呼吸を止めたまま、食い入るようにフランシスカの身体を見つめていた。

「なあに？ もしかして、恐いの？」

「……ごめんなさい」

「可笑しいわ。あなた、人間を死なせる黒猫でしょう？」

けらけらと笑うフランシスカの上着を引っぱるように脱がせ、彼女の上半身を裸にする。

ユニはベスが用意していたタオルを湯に浸し、力いっぱいしぼった。

そして温めたタオルをフランシスカの腹に乗せる。初めてで力加減が分からないので、できる限り優しく、ゆっくりとタオルで腹をこする。

「もっと強くしても良いわよ。それにそんなにゆっくりじゃ、いつまで経っても終わらないわ」

緊張しているユニはこくこくとうなずき、それまでよりもやや力をこめて腹とみぞおちをぬぐっていく。そしてタオルを湯ですすぎ、綺麗にする。

胸とわき腹、それに肩も丁寧にふいていく。指先に骨の感触を強く意識する。ユニは何度か己の全裸を鏡で見てみたが、年ごろの娘の身体はもっと丸みを帯びていて柔らかい。それなのに、フランシスカの身体は骨ばかりだ。寝たきりで運動もできず、食べるものも食べられなければこうなるだろう。生まれもった身体の欠陥が、フランシスカの身体をこうさせたのだ。優しく触れていてもふとした拍子に壊してしまうような危うさに、ユニの指はかすかに震えた。

首筋や両腕を綺麗にぬぐい、フランシスカの上半身を起こして片手で支え、背中をふく。ベスが危惧した通り、フランシスカの背中には汗まみれで放っておいたら体温の低下をまねくところだ。

開け放した窓から夏の夜のなまぬるい風が吹きこむ。部屋の中にはユニとフランシスカの静かな呼吸の音しかしない。ユニに背中を向けたままのフランシスカはさつきから黙っていて、何を考えているか分からずに不安を誘う。

「あんなベスさん、初めて見ました。意外な気持ちです。ベスさんは優しいんですね」

「この家はかなり広いのに、メイドはベス一人だけ。料理は雇ったコックに任せているけど、それでもベス一人には重荷よね。ユニも

メイドとして働いてるけど」

「わたしなんか、ベスさんに迷惑かけてばかりですよ」

「新しくメイドを雇っても、みんなやめちゃうの。私のせいだね」

フランシスカはユニに顔を見せず、「くくく」と小さな笑いをもらす。

「私はわがままでメイドにあれこれ文句をつけるし、黒猫を家に住まわせるって趣味も理解できないみたい。死にかけの私を気味悪がって、どのメイドもすぐに出て行くわ」

とうに背中をふいてしまっていたユニは、フランシスカの背中に両手を当てながら耳を澄ましていた。

「たった一人残ったメイド、それがベス。私がこうして今日まで生きてこられたのはベスのおかげといってもいいわね」

ベスは若い女性とは思えないほどに精神力が強い。まるで情を表さず、淡々と仕事をこなしていく。その姿はまさに鉄人といってもいいほどだが、ベスがハミルトン家のメイドを辞めない理由は忍耐力の強さだけではないようにユニは思っていた。その理由は、さつき必死にフランシスカを介抱していたベスの顔だ。

「もしかして、ベスさんが黒猫を嫌うのは……」

「私に死んでほしくないんですよ。黒猫がそばにいる限り、常に死の可能性がつきまとうから。ノーラを家に迎える時だって、ベスはすごく反対したものだ」

「アルマって黒猫のこともひどい言いようでしたよ。あれはフランシスカさんの命を狙う殺し屋だって」

「殺し屋ねえ」

苦しげに笑うフランシスカに新しい上着をどうにか着せ、そつとベッドに横たえた。

「下もお願い」とさりげなく言うフランシスカにうなずいて、ユニは彼女のズボンを脱がせる。腕は枯れ木のように細くてユニは驚いたが、あまりに細いももにユニは衝撃を受けた。まるで棒切れた。もう歩けないというフランシスカの言葉にも、この脚を見れば納得がいく。上半身と同じように、下半身も丁寧に温かいタオルでぬぐっていく。

「アルマはアルマで面白い黒猫よ。あの子と話していると良い暇つぶしになるから好き」

「……ベスさんの言っていたことって本当なんでしょうか？ フランシスカさんの命を狙っているって……」

「本当よ。私にはアルマの腹が読めているし、そのことにアルマの

方も気づいている。おたがいに腹のさぐり合いで、あのしらじらしい空気が癖くせになるのよ。命がけの遊びって面白いわ。ベスはやめろって何度も言うけれど」

フランススカのももからすね、足の指まで丁寧にふいたユニは、用意してあった代えのズボンをはかせる。動けない病人に服を着させるのは初めてで、腰がベッドと密着している分上着を着せるよりも難しい。

「ああ、良い気持ち。黒猫にこんなことをさせるのは初めてよ。ユニは優しいわね。私の身体に触れる手が温かいわ」

どこかで聞いた言葉だと思い、ユニは念入りに頭の中を探ってみる。思いだした。昼間、クロフォードがユニの手を握ったときにも温かいと言ったのだ。

やはりクロフォードとフランススカは親子だとユニは思う。上手く付き合えない二人でも、血の絆は思わぬ所で表現されるものだ。

「フランススカさん。もつとクロフォードさんとお話してみてもどうでしょう？ 今も部屋の向こうで心配していますし、フランススカさんとどう話せばいいのか分からないと言っていましたし」

「お父様の話はやめて。イライラするから」

それまで気分良さそうに微笑していたフランススカから急速に熱が失われていくのがユニには分かった。ユニははっとし、それまでリズムを取るように宙で揺らしていた尻尾を自分のももに巻き付ける。

「お父様に恨みがあるわけでも、憎んでいるわけでもない。どうでもいい。お父様への感情はそれだけよ」

ユニはうつむいたまま生まれもった様々な知識をひっくり返し、この気まずい雰囲気改善するための考えをとっさに打ち立てた。

「フランシスカさん。それはあれですよ。子どもが親に逆らうという、反抗期ですよ」

「ユニ。知ったような口で私を分類してほしくないわ。私の考えは、私自らが考え出した結論なの」

「け、結論……？」

「私の病気は悪化するばかりでベッドから一步も動けない。私はずっと立ち止まったまま。誰も彼もが私の前を歩いて通り過ぎていく。お父様もそのうちの一人に過ぎない。それだけのことよ」

これはそうとう根が深い問題だと、ユニは頭をかいた。クロフォードへのフランシスカの思いは、彼女が生まれ変わりでもしない限り変わることはないだろう。フランシスカの父親への考え方はすでに完結してしまっているからだ。

「ユニ。顔もふいて」

ユニはタオルをぬるくなった湯ですすぎ、よくしぼってフランシスカのほおに添えた。できる限り優しく、指先に心をこめて顔をぬぐっていく。

フランシスカがじつとこちらを見ているのに気づき、ユニは手を止めて彼女を見つめ返す。

フランシスカの灰色の目。それにユニの黒い瞳が吸い付けられるようだった。得体の知れない感情がふつふつとわき上がり、そのせい

でユニの胸がざわついた。

この気持ちは何なのだろう。友情？ 愛情？ 恋愛感情？ それとも今すぐ殺してあげたいという優しい気持ち？ 胸に満ちる感情の正体は生まれたばかりで経験にとぼしいユニには分からない。とにかく強い執着心だ。あえて言うなら所有欲に近い気持ち。

「ふふ。ユニ、今、とても怖い顔をしていたわ。人でない黒猫の顔よ」

ユニははっと我に返り、それまで硬直していた尻尾が勢いよくうねる。そして困ったように首をかしげた。

普通の人間なら病魔に蝕まれ痩せ細ったフランシスカを哀れに思うだろう。その悲惨な境遇に胸を痛めるだろう。だが、黒猫のユニにはそういう気持ちがよく分からない。こうしてフランシスカに触れていてもそれほど痛ましいとは思えない。生まれつき優しさの上限が低いのだ。

それもまた黒猫の特性なのかとユニは自分の胸に手を当てる。エプロン越しに触れる胸はほのかに柔らかかったが、ユニの胸の内側には冷たい暗黒がつまっているのかも知れない。

「良いわ、ユニ。あなたのそんな顔が見たかった。だから家に招いたのよ」

息を荒げながらうつすらと笑うフランシスカに、ユニは何も言葉を返せなかった。ノーラに言わせればユニは変わった黒猫らしいが、それでもたしかに黒猫なのだ。姿型は人と似通っていても、やはり本質的な部分では人間と違っている。ユニは人のフランシスカとは別物なのだ。

いつかユニの手でフランシスカを天に送る日が訪れるのだろうか。そんな暗鬱な思いで、フランシスカの首をぬぐう手の動きがにぶっ

た。

「！」

部屋のドアから視線を感じる。ユニの動物的な感覚器官は小さな異変を敏感に察知した。そのことをフランシスカに伝え、彼女からの頼みを聞いてユニは椅子から立ち上がった。

部屋を横切り、ドアを開ける。クロフォードがせきばらいをしながらちらちらとユニを見ている。こうやってごまかしているんだとユニは思った。

「クロフォードさん。フランシスカさんからの伝言です。もしも次に勝手に部屋の中をのぞいたら、舌を噛みちぎって死ぬそうです」

「なあつ……！？」

ユニの言葉の威力に圧おされるようにしてクロフォードがふらふらと後ずさり、背中を廊下の壁にはばまれて退路を失った。

愛しい一人娘が死の黒猫と二人きりでいたら不安になるのが親心だ。だが、そんなクロフォードの心配もフランシスカにとってはこの上なく不快らしい。

「ベスさん。フランシスカさんが呼んでいます」

それまで泰然たいぜんとドアの前に控えていたベスがうなずき、ユニと共に部屋に入る。

「ユニ。いろいろありがとう。気持ちよかったわ。最後に一つ、お願いがあるの」

そんな不吉なフランシスカの言葉に、ユニとベスはそろってベッドのそばで身動きを止めた。

「私のことはフランシスカと呼んでちょうだい。さん付けなんて他人行儀で嫌なのよ」

そして気力の糸がぷつんと切れたかのようにフランシスカは目を閉じた。かすかな寝息の音を聞き、ユニは安堵のため息をもらす。ベスはフランシスカの寝顔をのぞきこみ、続いて机の上に置かれた濡れタオルと丸められた寝間着を見た。

「お嬢様の着替えは、あなたが？」

「は、はい。フランシスカさん……フランシスカが、わたしにやってほしいと言うものですから」

フランシスカさんではなく、フランシスカ。頼まれた通りに呼び捨てにするユニにベスの目が険しくなったが、一瞬後には諦めたようなため息をついて元の無表情に戻る。

ベスは掛け布団をはだけてフランシスカの衣服をざつとチェックし、掛け違えたボタンをてきぱきと直す。ユニのミスについて、ベスは何一つ言わない。

メイドの達人のベスがいればもうユニの出る幕はない。そう思ってユニが猫耳を垂らしながらすすりごと部屋を出て行くことになると、背後からベスの声がかかった。

「仕事を途中で投げ出してはなりません。ここでいっしょにお嬢様の看病をなさい」

ベスは元から置いてあった椅子に座り、ほんのわずかな変化も見逃

すまいとフランススカの顔を凝視している。フランススカは安らかな寝顔で、熱に苦しめられていた先ほどとはうって変わった様子だった。

ユニはあわてて部屋の中を見回し、壁際に置いてあった客用の椅子を胸に抱えて運び、ベスの向かい側に置いた。椅子に座り、ベスのようにフランススカの顔をのぞく。

フランススカに起きる気配はなく、気持ち良さそうに眠っている。ベスはフランススカが峠を越したことを部屋の外でそわそわしているクロフォードに伝え、何ごとも無かったように椅子に座り直す。ベスとユニの間に会話は無い。静かで緊張した空気が二人の間についてまでも流れていた。それでもユニは、ほんの少しだけ自分のことを認めてくれたベスを前よりも好きになっていた。

それが好む好まざるに関わらず、何かの仕事や義務や目標があるからこそ人は時間に押しつぶされずに済む。屋敷の掃除という役目はユニに暇を許さない。

どこを見ても仕事が続々と見つかる。いつの間にか廊下の隅にわたぼこりができているし、花壇の手入れも手間暇がかかる。黒猫に生まれながらも誰一人死なせていないユニには、ベスの手伝い仕事が良い暇つぶしになっていた。

ユニは階段の掃き掃除を終えてひと息つくくと、フランススカの部屋へ行ってみようと思った。たまに彼女の部屋を訪れることがハミルトン家に住むための条件だったし、フランススカがまた病気に苦しんでいないかどうか気がかりだった。

フランシスカの部屋まで歩き、ドアをロックしユニだと告げる。ドアの向こうから届くフランシスカの許しを得てユニは中に入った。

「ようこそ、ユニ。ゆっくりしていい」

フランシスカはいつも通りにベッドの上に足を伸ばしていたが、上体を起こしてダルジャンヌと向き合っていた。思いがけないダルジャンヌとの遭遇にユニは息を呑む。

「……………」

ダルジャンヌはベッドのそばの椅子にひざを抱えた姿勢で座っていて、部屋にやってきたユニをじっと見つめている。あいかわらず、何を考えているのかまるで分からない。

「ほら、ダル。貴女の番よ。早くして」

フランシスカにせかされてダルジャンヌはのろのろと机の上に視線を落とす。フランシスカとダルジャンヌの間には丸テーブルが設置されていて、テーブルの上には駒が並んだチェス盤が置かれていた。ダルジャンヌはしばし赤紫色の目を盤上にくぎ付けにし、ルークの黒い駒を三マス分移動させてフランシスカ側の白いポーンを殺^とつた。そうしてダルジャンヌは真っ黒なスカートの中に左手を突っこみ、猿か何かのようにすねをぼりぼりとかく。

「よお、ユニ」

「ノーラさん!？」

ふと気づけば、部屋の端の窓の下にノーラがいた。ノーラは壁に背中を預け、フランシスカとダルジャンヌの対局をぼんやりと見守っている。

「どうしてみんな集まっているんですか？ 今日は何かの集会ですか？」

「いいや。お嬢の部屋はまあなんて言うか、一種のサロンだからな」

「ユニ。こっちへおいでなさい」

フランシスカがベッドの端をぼんぼんと叩き、ユニを手招きする。特に断る理由もなかったユニは、誘われたとおりにフランシスカの隣に腰を下ろす。

嫌でもすぐそばのダルジャンヌを意識してしまう。ユニは気づかないようにダルジャンヌに目を向けると、彼女がユニを見つめていたせいで視線がぶつかり合う。ユニはあわてて目をそらし、盤上の攻防に視線を移した。

「みんなが私の部屋に集まるのは初めてね」

フランシスカはそんなことをつぶやきながら、クイーンの駒でダルジャンヌのビショップを蹴散らす。兵の損失に痛みを感じているのかいないのか、ダルジャンヌは病んだ目で戦局を見すえながら頭をかく。

「ユニももっと私の部屋でのんびりすればいいわ。もともと、掃除をする義務なんてないのよ」

「でも、ただで置いてもらうのはいけないことだと思いますし」

「だそうよ？ ノーラには耳に痛いんじゃないよ？」

「べーつにいい。働かないで済むならそれに越したことはないさ。働かずに優雅気ままに暮らすこと、それは人間と黒猫の夢だからね」

静かな部屋の中に、二人が駒を動かす硬質な音が響く。二人が何をやっているのか、ユニにはよく分からない。盤上の六種類二色の駒を交互に動かし、自分の駒を敵から逃がし、相手の駒を殺している。

「……ダルジャンヌ、強いんですか？」

フランススカに身を寄せて小声で問うと、フランススカは盤上を見つめたまま真剣な声で応える。

「この子の強さは日によってところどころ変わるから、真の強さは分からないわ」

フランススカの声と表情は固く、今の彼女にはあまり余裕がないことを物語っている。殺された駒が盤の横に置かれているのだが、死んだ駒の数はフランススカの方がダルジャンヌのそれよりも多い。つまり、フランススカの方が多くの兵を失っていて、追いつめられている。

フランススカが常に盤上を見つめているのに対し、ダルジャンヌには集中力がうかがえない。フランススカが自軍の駒を進めているときは部屋の向かい側を見つめていたり、そばに座っているユニに目を向けたりしている。それでもなお懸命に頑張っているフランススカを追いこんでいるのだからユニには不思議だった。

ダルジャンヌが頭を上下に揺らせるたびに、彼女の頭上に浮かぶ光輪が頭と並行に宙をすべる。光輪はぼんやりと黄色く光っていて、ユニからすれば奇妙でならない。どんな力が働いて浮いて光っているのか、ソレはダルジャンヌの身体の一部なのか、全ては謎だった。ゴシック調の黒いドレスの背から生えた羽も作り物ではない。ダルジャンヌが腕を動かすたびに、かすかに羽が揺らめいていた。明らかに独自の力で羽が動いている。

ルビーを思わせる、ダルジャンヌの赤紫色の瞳。死人のように白い肌。曇り空を思わせる灰色の髪。頭の光輪に背中の小さな羽。どれもこれもフランススカやベスのような人間の身体とは一線を画している。髪や目が黒くて猫耳と尻尾が生えている、人ならざる黒猫よりも異様だ。

多くの駒を殺られて逃げの一手になっているフランススカ。兵を犠牲にしながらキングの駒を盤の端へ逃がしているが、そこへダルジャンヌのナイトの駒が白のビショップを跳び越えて奇襲をかける。それでフランススカのキングが殺された。

「ああ、チエックメートね。今日のダルは強かったわ」

王を詰まれ、フランススカの敗北が決まる。フランススカの強ばっていた表情が緩み、ふうと小さなため息をついて笑う。

「勝った」

いきなりダルジャンヌがユニに顔を向け、そんなことを口走る。自慢しているのか褒めてほしいのか、その完璧な無表情からは内心がまるでうかがえない。

「す、すごいなあ、ダルジャンヌは」

尻尾を硬直させながらあいまいな笑顔を浮かべるユニにもダルジャン又は無表情を崩さない。何を考えているのかは不明だが、彼女がユニを気にかけていることだけは確からしい。

「勝負もついたところで、お茶でも飲みたいところね。せっかくこうしてみんなが集まっているのだし」

チェスに負けようと悔しがる様子もなく、フランシスカはユニを見て「お茶会をしましょう」と微笑む。

「でも、わたし、お掃除の途中ですし」

「真面目な奴だなあ。いいじゃない、たまには身体を休めれば。お前、黒猫のくせに少し働き過ぎだ」

「ね？ ノーラもそう言っているのだし、そうしましょう、ユニ」

フランシスカとノーラの二人に押し切られる形でユニはうなずき、ベスにフランシスカの決定を伝えるために部屋を出て行った。

それから一時間あまりをかけて臨時のお茶会の準備が整えられた。それまで庭仕事をしていたベスがフランシスカの部屋へおもむき、他の部屋から移動させてきたテーブルの位置を調整する。純白のテーブルクロスを用意し、それをてきぱきとテーブルに被せ、ユニは不器用ながらベスの仕事を手伝った。

ベスの準備と並行して住み込みのコックが厨房でクッキーとケーキを焼き、湯を沸かす。そしてそれらをベスとユニがフランシスカの部屋へ運んでいく。

部屋に満ちていく香しい紅茶の匂いと、甘いお菓子の薫り。ユニは思いがけない労働に額に汗を浮かべていたが、目の前に次々と並べられていくごちそうに腹が鳴ってしかたがなかった。

特に挨拶らしいものもなく、静かにお茶会が始まった。ベスが物言わぬ影のようにフランスカの横に控え、テーブルの上のケーキやスコーンを小皿にとってフランスカに渡す。フランスカはベッドに腰をかけたまま、そばのテーブルの上に置かれたティーカップを取って軽く揺らし、その薫りを楽しみつつこくこくとゆっくりと飲んでいく。

お茶会といえば貴人達の集い。お茶とお菓子を楽しみながら笑顔で話を交わすものだが、ハミルトン家のお茶会は慣例を逸脱していた。参加者はそれぞれ好き勝手に飲み食いしているだけで、誰も何も話さないのだ。

フランスカは独りで内面世界に浸っているし、ノーラは壁によりかかったまま本を読みつつ皿の上の菓子を手づかみで口に運んでいる。ダルジャン又は壁際にひざを抱えて座っていて、紅茶が入ったカップを両手で大事に持っている。暗い目をしたままぶつぶつと小声で独り言をつぶやいている。そのせいでユニは彼女に話しかけることも近寄ることもできなかった。ベスは病弱なフランスカの要求に瞬時に応える機械か何かのようで、無駄口はいつさいたたかない。

何もしない時間がゆつたりと流れていく。ユニはテーブルの前の椅子に座って紅茶をすすり、たまにケーキをフォークで切って口に運ぶ。甘さが口いっぱいに広がって思わずほおが緩んでしまう。この異端のメンバーの中では比較的まともにお茶会を楽しんでいた。

何かの仕事に没頭していれば暇を感じなくなる。メイド見習いとして働いてきたユニにとって忙しさは一種の快感だったのだが、こうして何もしない時間というものには慣れていなかった。

何か、何かしなければ。ユニはそう思ってそわそわと尻尾を揺らめかせるものの、飲んで食べる以外にやることがない。誰にも強要されていないのに、お茶会を楽しまなければならない空気に吞まれていた。掃除仕事に戻りますと言って席を立とうものなら、今の穏やかな雰囲気をぶち壊してしまうのが分かっていた。

ユニは大きいため息をつく。いら立ちや不満によるものではなく、胸の内に溜まったはやる気持ちを吐き出すためだ。ガス抜きをして気を落ち着けて、改めて周りを見る。

誰も言葉を交わさないが、少なくともダルジャン又以外は楽しんでいるように映った。今は肩ひじを張らずにのんびりしている。誰かの目を気にする必要がない。それが許されている。

何もしない時間もいいものだ、ユニは素直にそう思う。ただ急ぐばかりが正しい生き方ではなく、時には立ち止まって周りの景色に心を和ませるのも大切だ。そう思うと、カップから立ち上る紅茶の薫りにさえ世界の真理の一つが秘められているような気がした。

「どこか、遠くへ行ってみたいわ」

「……ああ、行ってみたいな。無理だけど」

窓からのぞく曇り空を眺めながらぼんやりと言うフランシスカに、
ノーラが本に目を落としたままそぞろに応える。

「樹と花。川に鳥に虫。澄んだ空気と風。お店と民家、それに私の知らない街の人達。そういったものを見て感じてみたいわ。この街の外には、どんな世界が広がっているのかしら」

わざわざフランシスカにたずねなくてもユニには察することができた。フランシスカは重病のためにずっとベッドに縛られていて、外に出られない。だから彼女の世界はこの白亜の部屋と、窓からのぞく曇った空だけなのだ。

部屋の誰も何も言わない。ユニがさり気なく周囲の気配をさぐってみても誰にも目立った変化はないように思われた。変化の無さを薄情だと感じるのは、この場の誰よりもユニの神経が繊細だからか、それともフランシスカの言葉に皆が慣れてしまっているからか。

「……ノーラさんは、この街の外へ出たことはあるんですか？」

「ねーよ」

では黒猫の中でも情に厚いらしい自分が頑張らなくては。ユニはそっと笑みを浮かべ、フランシスカを見つめる。

「フランススカ。今度わたしが街の外へ出て、そこで見聞きしたことを教えてあげますよ」

「何言ってる。黒猫は生まれた街から出られないんだよ」

「……………え？」

きよとんとするユニに、ノーラが手元の本から顔を上げてこちらを見た。ほんの少しだけ表情が険しい。

「黒猫は街から出られないんだ。天の意思が何か知らないけど、出ようとしてもどういうわけか身体が動かなくなる。あたしもユニも、一生この街の外へ出られない」

「ありがとう、ユニ。気持ちだけ受け取っておくわ」

微笑むフランススカに、ユニは猫耳を垂れさせてうなずく。それほど街の外を探検したいとは思っていなかったけれど、実は大きく自由を制限されている身だと知って落ちこんでしまう。

外に出たいけど無理だとノーラが先ほど言ったのは、フランススカへのいやみではなく黒猫であるノーラ自身のことだったのだ。

このハミルトン家に生まれてから、今まで何一つ不自由せずに暮らしてきた。振る舞われる料理は美味しいし、フランススカから与えられた個室とベッドは広く、温かい。何も不足を感じずにベスの手伝いに明け暮れていたが、屋敷の外はどんな世界なのだろう。すぐそばに広がるメメントモリの街はどんな所なのか。そんな疑問に、ユニはお尻の黒い尻尾をせわしなく揺らせた。

「黒猫が好きなのは、外に出られない所が私と同じだから。ある意味でノーラもユニも私の同類ね」

フランススカは心底楽しげに笑う。一生街に束縛されると知って落ちこんでいるユニにもお構いなしだ。

街から出ることを許されず、死にたい人間を優しく殺してあげる黒猫。黒猫はいつたい何のためにいるのだろう。このところ頭の外へ放り出していた疑問が戻ってきて、ユニはうつむいたままカップの底を見つめていた。

「ベスはこの街で生まれ育った人間だし、この中で街の外を知っているのはダルだけね」

フランススカの視線を受けて、ダルジャンヌがのろのろとうなずく。それまで部屋の片隅で阿片中毒者のように何かをつぶやいていた彼女を、ユニはふたたび意識する。慣れとは恐るべきもので、屋敷のどこかでダルジャンヌを見かけ、背後霊のように追いかけるたびにユニは彼女への耐性をつけてしまっていた。今の今まで異常なダルジャンヌを空気のように当たり前のものとして感じていたのだ。

「きつと外では男と女が恋の喜び謳歌おつかをしているのでしょね」

「恋？」

聞き慣れないフレーズに、ユニが耳をぴんと立てる。

「私は恋も知らずに、この狭苦しい部屋の中でひっそりと朽ちて死んでいくのだから。処女で未婚で子どもも生まないまま……」

「お嬢様。レディーがはしたないですよ」

「こんなこと、本気で言っていると思うの？ ベス。ただの冗談よ。」

私からすれば恋愛なんか糞食らえよ。恋に堕ちた人間は熱に浮かされて正気を失っているのよ。恋は理性の墓場ね」

「ノーラさんは、恋というものをしたことはありますか？」

「ねーよ。黒猫は恋なんてしない。一人で生まれて、一人で消えていく。ユニには母親も父親もいないでしょ」

ユニは「ううむ」とうなり、両腕を組む。また一つ発覚した恋をしないという不自由に、どうにも気分がしぼんでしまう。

ユニにとっての母親は、いわば影。一片の光も差さない闇の子宮から生み出され、気づけば裸でハミルトン家に立っていた。ノーラの言うとおり、黒猫のユニの誕生には恋も愛もまったく関係ない。

「黒猫は恋をしない。そこも私と同類ね。だから黒猫って好きよ、ユニ」

「はあ」

返事ともため息ともつかない声をフランススカへ返し、ユニは窓の外を曇り空を見つめた。

この街の空は昼も夜も常に曇っている。夕方に紅い夕陽が差すだけだ。ユニは生まれてからずっと屋敷にこもっていて、まだ外に出たことがなかった。今までそれほど外に興味を抱かなかったし、ハミルトン家が新生の黒猫を独占していることを世間から隠すためだ。だが、いつまでも屋敷にこもっていてもユニの世界は閉じたままで変化が訪れない。ユニの胸にはまだ見たことのない人間や恋というもの、それにメメントモリの街への興味がめばえていた。

「わたし、ちょっと外へ出てみようと思うんです」

ユニの言葉に、部屋の空気が瞬間的に緊張するのが肌へ伝わってきた。だめかなと思いきる恐る恐るそれぞれの顔をうかがうが、怒ったような顔の者は一人もいない。

「そうね。そろそろユニは外へ出てもいい頃でしょう」

「ま、ほどほどに冒険してくるんだね」

「外が気に入れば、そのまま帰ってこなくても結構ですよ」

ベスの辛辣な意見が耳に痛い。ベスにとってはフランススを殺す可能性がある黒猫が消えるとなれば願ったり叶ったりだろう。だがフランススカとノーラはユニの意思を尊重してくれている。ダルジャン又は死んだような目でユニを見ているだけで、どう思っているのかあいかわらず読めなかった。

初めての外出用に仕立ててもらった洋服。ひかえめでありながら確実に品と愛らしさを演出するレースとフリルの組み合わせ。ユニは新品の黒のワンピースをまとい、何度も姿見の前で自分のいでたちを確認する。ちゃんと尻尾が出せるように専用の穴も開いている。ひざ丈のスカートがターンステップにつられてふわふわと舞う。まるでお姫様だ。ユニはそれを見て微笑み、鏡の前でつたないポーズを取ってみる。そうして満足した後、ユニは書斎で仕事中のクロフォードに外出の挨拶をしに行った。

「ユニがこの家に住んでいることは内緒だよ。それに、ダルジャン又のことも秘密だ」

そう何度も念を押され、「気をつけて行ってきなさい」と優しく笑いかけられる。ユニも笑顔で返事をした。

バスとノーラに玄關まで見送られ、ユニはいよいよ外の世界を前にして胸を高鳴らせる。

「いいですか、ユニ。間抜けなあなたに多くを期待できないことは分かっていますが、それでもハミルトン家の名誉をおとしめるような真似だけは許しませんよ」

「はい……」

ベスの冷たい目に見下ろされ、ユニは宙でくねっていた尻尾を萎えさせる。正午前で汗ばむほどに気温が上がっているのに、ベスの周りだけ真冬のように冷え冷えとしている。

「ま、^{気が}張らず適当に楽しんできな」

ノーラは火のついたタバコをくわえたまま腕を組み、淡い笑みを浮かべている。そんな先輩黒猫のノーラにユニの緊張が解きほぐれていくようだった。

「ノーラさん。わたし、頑張つてアルマに会いに行つてきますね」

「アルマねえ」

ノーラが目を閉じ、ぼりぼりと頭をかく。

アルマ。フランシスカと交流をもつ黒猫。ベスいわくお嬢様の命をつけ狙う欲深な殺し屋。アルマはユニにぜひお店に遊びに来てほしいと言ってくれた。ならば彼女の示した友情に誠意をもって応えな

くは。

「あいつは腹の底が読めないところがある。あんまり信用しちゃいけないよ」

そんな意味深な忠告にユニは首をかしげ、ぴくんと猫耳を震わせる。アルマの正体が分からない。ユニに向けた穏和な態度は嘘なのだろうか。ユニの優れた直感力はアルマの中のざらついたものを訴えていたが、その違和感には何となくというあいまいな根拠しかない。ベスの評価やノーラの否定的な言葉が正しいのかどうかはユニがアルマに会って直接確かめるしかなかった。

ユニ達が立つ正門からはフランシスカの部屋の窓は見えない。ベツドの上から身動きがとれない彼女の見送りは期待できないが、それでも新調してもらった服に着替える前には「楽しんできなさい」と心温まる言葉をかけてもらった。

ダルジャンヌの姿は見えない。それでも彼女特有の暗く湿った視線と気配をひしひしと感じる。屋敷の中からとどく黒いオーラがユニの全身をねっとり包んでいるようで、ユニは身震いし尻尾を硬直させる。

「イ、イッテキマスっ！」

ユニはベスとノーラに勢いよく頭を下げ、固い足取りで門の外へ歩み出た。

石畳の長い一本道を抜けるとすぐに大通りへ出る。目の前の広々とした空間にユニは解放感と心細さを同時に覚えていた。

ベスの庭仕事を手伝ったり気晴らしに庭を散策したりしていたから家の外に出るのは初めてではない。しかし、その限定された風景と現在の自由な場所は情報量が圧倒的に違う。

肌をなで髪を揺らせる風。そこに含まれる様々な匂い。大量の足音とそれに等しい数の呼吸音。熱を帯びた空気と湿気。目の前に立ち並ぶくすんだ色の建物の群れ。何もかもがハミルトン家にいたときと違う。ユニの鋭敏な感覚器官は周囲の情報をあますところなく精細に取り込み、それまで閉じていた感覚が次々に開発される。急速に世界が広がっていくめまぐるしさにユニはたじろいでしまう。

空を見上げればいつも通りの曇り空。この街の空はいつでも曇っている。灰色の雲の向こう側に何があるのかをユニは知らない。

道をたくさんの人間が行き交っている。当然、誰一人としてユニは知らない。フランススカヤベスのように猫耳も尻尾もついていない。髪も目の色も黒でなく、金色や茶色が主だ。貴人であるクロフォードの服と違い、彼らの服の形と色は地味で質素な印象だった。

往来の真ん中に突っ立っているユニにたくさんの視線が向けられている。そのことに気づいたユニは目立つのを避け、人の流れに乗って大通りの先を目指して歩く。

向かい側から歩いてくる人間と、ユニの横を並んで歩く人間がユニを見ている。かなりの数だ。彼らの目に嫌悪の色はなく、見慣れない珍しいものに目を見張っているようだ。人の群の中で真っ黒な黒猫はやはり異質であり、相当に人目を引く存在らしい。有名人になったようにユニの頬が緩む。世界の支配者になってもなった気分だった。

「（淑やかに。お上品に）」

ベスに言われたことを思い出し、ユニは目を閉じ小さな胸を張って

道に行く。そのうちにユニはかぐわしい薫りに包まれて目を開けた。ユニは市場の中にいた。道の左右に色とりどりの食べ物や並べた出店が並んでいる。

食欲をそそる干し肉に新鮮な魚。みずみずしい果物に焼いたばかりのパン。そして鮮やかな花々と苗が生えた植木鉢。ユニは都に上ってきたばかりの田舎者のようにきよきよとしたながら市場通りを進む。

腹を鳴らしながら果物屋をのぞいていると、その女主人がユニを見つめてくる。

「見ない顔の黒猫だねえ。仮装つてわけでもなさそうだし……」

「わたし、最近生まれた黒猫なんです」

ユニの頭の猫耳と揺れる尻尾を見つめる中年の女主人に、ユニはもじもじと指と指を組み合わせる。

「へえー！ 見ない黒猫だと思ったらどおりで。じゃああいさつ代わりに持つてきなよ」

女主人は豪快に笑い、台に並べてあった赤い林檎りんごを三つ、ユニに手渡す。

「わたし、お金持ってないんです」

「いいっていいって。これはお供そなえみたいなものなんだからさ。気にせず取っておいておくれよ」

「黒猫が、わたしが恐くないんですか？ 黒猫は人を死なせるみたいですよ」

「そりゃあ中には黒猫を恐がる人もいるさ。でもたいていの人間は街の黒猫を守り神みたいに思ってるよ」

「守り神、かあ」

思わぬ好評にユニは嬉しくなって尻尾を激しく揺らせる。

「それに黒猫の力を当てにするようになったらお終いだよ。黒猫が街にいるからあたし達は頑張らなきゃって思うのさ」

「はあ？」

意味が分からず耳を垂れさせるユニに女主人は大笑いする。ユニは林檎の礼を言っただけで屋台を離れた。

市場を進むたびに屋台の人間に「もしかして新しい黒猫かい？」と声をかけられ、頼んでもないのに何かしらの食べ物ももらってしまう。最初にもらった林檎をかじっている最中だったのに、またたぐ間に荷物が増えていく。市場を抜けるころには、両手が干し肉や野菜や果物でいっぱいになってしまっていた。

黒猫は人々に愛されているらしい。バスにさんざん拒絶されていただけに黒猫の自分に自信がもてなかったのだが、両手を埋める贈り物を見るとユニは意外な思いだった。

両腕に抱えた食べ物に視界をふさがれながらよたよたと歩いていると、ユニはいつのまにか広場に来ていた。周りを見れば人間達が立ち話をしていたり、タバコを吹かしていたり、井戸で水をくんだりしている。

「はー……。いい場所だなあ」

広場は憩いいどの場。人々が絶え間なく行き交う大通りよりも、時間の流れが穏やかでゆっくりなように感じる。

ユニが広場のすみにたたずみ心を和ませていると、視界の端に人間の頭が入った。四人の小さい人間で、それは大人に対し子どもという種類だ。四人の子どもは店の前に並べられた酒樽さかたるに半身を隠しながら遠巻きにユニの様子をうかがっていたが、やがてユニに駆け寄ってきた。

「黒猫だー！」

「黒猫がいる！」

「しっぽがついてる！ 頭に耳も！」

ユニの生まれもった知識と照らし合わせれば、おそらく彼らは五歳前後。男の子三人と女の子一人に取り囲まれ、いつせいに見上げられ、ユニはどうしていいのか分からずに尻尾を腰に巻き付けてしま

う。
生きてきた年数なら生まれたばかりのユニよりも彼らの方が上だろう。外見も精神年齢もユニの方が大人に近いが、ユニは目の前の子どもをどう扱えばいいのかとほうに暮れた。

ユニが接してきた人間達とは違い、子ども達の振る舞いにはつかみ所がない。一言で言えば行動原理が混沌カオス。大人と同じ人間とは思えず、小動物か妖精のようだとユニは感じていた。謎のダルジャンヌに近いものを感じる。

男の子の一人が腕の中の食べ物に目を向けているのに気づき、ユニは名案を思いついた。その場にしゃがみ、男の子と視線の高さを合わせる。

「ほら。どれでも好きなのをあげますよ」

とりあえず笑って見せるユ二に、男の子はおずおずとオレンジを手
に取った。

「ほかのみんなも、どうぞ。早い者勝ちですよ」

ユ二の掛け声に、両手をふさいでいた食べ物がみるみる減っていく。
ユ二としては重くて困っていた荷物が減って助かるところだ。
その場でユ二からもらったパンや肉を食べ始めた子ども達に、ユ二
も石畳の上に座りこんで残りのチーズを食べ始める。子ども達はユ
二に習い、ユ二を囲むようにして座りこんだ。

「ねえねえ、黒猫のお姉ちゃん。黒猫って、ほんとうに人を殺すの
？」

「黒猫って、人間を食べる？」

「食べません。それに黒猫は死にたい人しか殺しません。自分から
は死なせちゃいけない決まりなんです」

「お姉ちゃん、名前は？」

「ユ二です」

「ユ二！ 黒猫のユ二ー！」

何が楽しいのかきゃあきゃあとさわぐ子ども達にぽかんとしつつ、
ユ二はチーズの欠片を口に放りこんで立ち上がる。

「ユ二はどこに住んでるの？ その服、きれいね」

小さな女の子に無垢な目を向けられ、ユニは口ごもる。新生の黒猫であるユニがハミルトン家に独占されていることはできる限り隠さなければならぬ。すでにノーラがフランスカに囲まれているから、二人もの黒猫を独占しているとなればクロフォードへの非難がわき起こるのは必至だ。

「ええと……。あ、あっちの方です……」

ユニは適当な方向を指差して女の子の顔色をうかがうが、彼女は「ふーん」とつぶやいたきり手元のパンにかじりつく。ユニの所在を気にしているのかどうでもいいのか、いまいち分からぬ。

うかつに街中をうろついてもまたたくさんの食べ物をもらったり、見知らぬ人間にからまれかねない。ここはさっさと目的地のアルマ宅を目指すのが得策だろう。

「ちょっとお聞きしたいのですが、アルマという黒猫の家を知りませんか？」

「知ってる！ おれ、見に行ったことがある！ 黒猫がいた！」

「アルマの家は怖いところだから行っちゃダメだってお母さんが言ってた」

「怖いところ、ですか」

「怖い場所だー！ 行くと死んじゃうー！」

小躍りするようにユニの周りではしゃぐ男の子達のため息がついてみると、パンをほおばっている女の子が顔を上げてユニを見た。

「アルマの家の場所はね……」

言葉がたどたどしくて決して分かりやすい説明ではなかったが、ここからアルマの家までの道のりを教えてもらう。ユニが気まぐれに与えた食べ物子ども達の機嫌を取ることに一役買ったようだった。

「しっぽー!!」

「!?!?」

女の子の知る道順とユニの理解が食い違っていないか確認をしていると、何の前ぶれもなしにユニの尻尾が男の子の一人につかまれた。凄まじい感覚が尻尾から全身をめぐる脳天を突き上げる。身体中をたくさんブラシでなでさすられるようなくすぐったさともどかしさ。生まれて初めての強烈な感触だった。

「あははは。によるよろしてる。へびみたい」

「や、めてえ……! 触っちゃ、だめ……っ!」

一瞬で顔が上気し、脚から力が抜ける。ユニの懸命の抗議にも男の子達はおかまいなしだ。二人同時に尻尾をつかみ、なでたり引っぱったりをくり返す。完全におもちや扱いだった。

ユニはついに足を支えられなくなり、へなへたと四つんばいになる。頭の中で大きな音が鳴り響いているかように思考が白く塗りつぶされる。そのせいで動くこともまともに声を出すこともできない。

正体不明の圧倒的感覚に押しつぶされ、呼吸が乱れて涙と汗がにじむ。その状態はユニの尻尾で遊ぶ男の子たちが飽きるまで続いたのである。

11頁 「猫をかぶった黒猫」

「うつつ……。とんでもない目に遭った」

女の子に教えてもらった道をたどりながら、ユニは得体の知れない感覚の余韻よゐんに身体をぶるつと震わせた。

まだ身体の芯が熱く、じんわりと痺れている。あの強烈な体感は一切何だったのか？ ユニは尻尾に手を伸ばそうとして途中で腕を止めた。今はそんないかがわしい探求にふけっている場合ではない。

早くアルマの家を目指さなくては。

女の子の説明不足に加えてユニが街に不慣れなこともあり、なかなか目的地を見つけられない。観光者か何かのようにきよるきよると見回しながら街中を歩いていると、たびたび往来の人達と視線がぶつかり合う。やはり新生の黒猫ということでユニは相当に目立っているようだ。

「あ、恋人同士」

ユニの向かいから歩いてくる若い男女に目を奪われ、ユニは民家の前で立ち止まった。カップルはユニを気にすることもなく、道の向こうの広場へと歩いて行ってしまふ。

恋。人間が相手の人間へ抱く特別な気持ち。ユニは恋をしたことはなかったが知識として恋のことを知っていた。

人はなぜ恋をするのか？ ユニが目の前で行き交う男女に目を凝らしても何も胸に変化を覚えない。誰にも恋や愛を感じない。この異様な不感症と心の安定感は一生物かもしれないと感じる。

もしも恋が化学反応のようなもので、特定の誰かと出逢った時に反応が起こり劇的な変化がおとずれるものだとしたら、ユニは誰とも何とも反応しない。ユニの心はまるで金や白金のように極めて安定

的で、酸素や水や化学物質が溶けた水溶液に浸食されない。

ノーラは黒猫は恋をしないと聞いた。恋をしないとすることは果たして心の平穏か、それとも華を失った絶望の道か。ユニは気になつて民家の軒先にたたずんだまま尻尾をふらふらと揺らす。

持病で苦しむフランシスカを介抱した時に抱いた感情。あれはおそらく恋などではない。もつと正体が分からず、暗く冷たく、何かまがましいものだ。

恋について、ユニはユニなりに仮説を立ててみることにした。恋の実感も経験もないので足りない部分は思考の労働と想像で補うしかない。

フランシスカは恋愛など糞食らえと暴言を吐いていた。だがユニには彼女の言葉が正しいとはどうにも思えない。人通りでたまに見かける恋人達は皆幸せそうだし、生きる喜びを噛みしめているように見える。恋愛の結果によつては糞食らえな最後になるのかも知れないが、それでも恋をし合っている時は少なくとも幸福な状態にあるようだ。

フランシスカは寝たきりの生活が長い。そのせいで少々歪んでいるところがある。それも当然だ。ひなたでのびのびとまっすぐに育つた花と、日陰でうじうじと育つた花では大きさも葉の形も違う。だから彼女の極端な意見を鵜呑みにするわけにはいかない。フランシスカはかなりの異端であり、あくまで少数派なのだ。

道行く恋人達は手を繋いでいたり、腕を組んでいたりする。どうしてそんなにベタベタするのかユニには分からない。この汗が噴き出す暑さで触れ合ったら余計に暑くなるだろうに。

そうまでして触れあい、繋がり合う利点は何なのか？ そこに何かのたしかかな理由はあるのか？ ユニはあごに左手を添え尻尾を揺らし、行き交う人達の注目も気にせずに恋人の観察を続ける。

そしてユニは閃いた。触れ合うこと、誰かと深い関係をもつこと自体が人の心を癒すのではないだろうか？ 良い気分を生み出すのではないか？ 楽しげに微笑む合う恋人同士を見ているとユニにはそ

うとしか思えない。

フランスカはベッドの上に縛られたまま目の前を通り過ぎていく人達を見送ることしかできない。だから彼女は誰ともつながり合えず、寂しいはずだ。ならば寂しさの反動から、誰かと繋がる喜びを全否定してもおかしくはない。

こんな寓話くわくわをユニは知っている。高い木の枝に下がったブドウを食べようとしてキツネが何度もジャンプをするが、高みにあるブドウには決して届かない。キツネはくやしきまぎれに「このブドウはすっぱくてまずいに違いはない」と決めつけてその場を去ってしまう。フランスカはブドウという恋に届かない、ひねくれたキツネではないだろうか……。

恋とは誰かと繋がりをもとうとする気持ち。ユニは以上の考察からそう仮説を打ち立てた。世界の秘密の一つに触れたような気がしてユニの胸がはずむ。ユニは淡い笑みを浮かべつつ、ふたたび人の流れへと歩み出した。

そうしていくらか道をさまよい、ユニはとうとうアルマの家を見つけ出した。「アルマ黒猫事務所」という立て看板が立っていて、こちらの家よりも一回り大きい家だ。外観は目立たないが、家の大きさがアルマの財力を物語っている。

ユニは緊張に胸を高鳴らせながらドアをノックする。ドアが開き、隙間からアルマの笑顔がのぞく。

「まあ、来てくれたんですね、ユニ。今はお客様が見えているので、こちらで少しだけ待っていて下さい」

愛想の良い空気に、ユニはこわばっていた尻尾がやわらかくなる。ユニと似たような黒服姿のアルマに導かれ、本棚が壁に並ぶ小綺麗な応接室へ通される。

そこには先客の人間がいて、ユニは声に出さずに驚いた。てっきり別室へ案内されると思っていたからだ。ユニは部屋のすみに置いて

あつた小さな椅子に座るように言われ、その通りにする。

長机をはさみ、ソファーが二つ設置されている。どんよりと暗い目をした初老の男の向かい側にアルマが座り、彼ににっこりと笑いかける。

「お待ちせしました。そちらは同僚ドウリョウの黒猫ユニです。どうぞお見知りおきを」

「この事務所にはあなた以外にも黒猫が……？」

「ええ。二人の黒猫による、お客様の要求にかなったサービスを自由に提供するというのが我が事務所のモットーなのです。このような黒猫の事務所は街に二つとありません」

ユニは「おやおや？」と思い、尻尾を丸めた。ユニがアルマの同僚？ そんな話は聞いていない。ユニは不思議に思いつつも眼前のなりゆきをおとなしく見守った。

うなだれたままぼそぼそと話す男には見るからに生気がない。彼の身の上話を聞くうちに、どうやら彼は事業に失敗し、わざわざ他の街から黒猫に殺してもらいにやってきた人間らしいことをユニは理解した。

初めて見る黒猫の仕事現場。ユニは肩を張り、アルマの話を食い入るように聴き入った。

「全財産の30%相当が仕事を請け負う対価となります」

「しかし、家族にもできる限り遺産を残しておきたいのだが……」

「お客様の街の黒猫達の平均的な値段からすれば格安のはずです」

常に柔らかな笑顔を絶やさずに男をなだめすかすアルマ。あの世に金は持っていけないとはいえ迷惑をかけた妻や子どもに少しでも財産を残したいという男を巧みに誘導し、代金を少しずつ割り引き、時には慰め、時には脅迫的な言葉をささやき、だんだん依頼人をその気にさせていく。

説得話の中に何度もユニという名前が使われ、アルマとユニの二人で安らかな死を贈ってきたと情感をこめて語られる。もちろんそんな話はでたらめだ。しかし嘘だとは分からない男はアルマの話を信じ込み、たびたびユニの方へうつろな目を向けてくる。

「それではまた後日、確認をしましょう」

一通りの話をまとめたアルマはその日の商談を終え、最後まで笑顔のまま男を送り出す。彼女の後ろ姿をユニは口を半開きにしたまま眺めていた。

黒猫としては誰一人として死なせていないユニにはアルマがどれほどの腕か分からない。それでも今の人間はアルマに死なせてもらうことになるだろうと確信していた。もう彼には生きようとする気概がなく、完全に心が折れてしまっている。しかもアルマの話が上手く、彼女の口車に乗せられてしまっている。近いうちに彼はアルマの手で地上を去るだろう。

アルマは表へ出て看板を屋内へしまい、玄関のドアにクローズドと書かれたプレートを下げた。そしてユニの前へ戻ってくると後ろ手でドアの鍵をかける。

「あ、あの……アルマさん……?」

「ああ、気にしないで下さい。今日はもう店じまいです。ユニとじっくりお話をしたいので」

アルマはユニを連れて応接室へ戻り、ソファに座って待っているように指示。ユニが言われた通りにしていると、アルマがトレイにティーカップを二つ載せて戻ってくる。

アルマと向き合って座り、二人で紅茶をすする。ハミルトン家で振る舞われる最高級の茶葉から淹れたお茶にはかなわないが、それでもまずまずの味だ。歩き回ってのどが渴いていたので飲み物はあるがたかった。

何かと良くない評判がつきまとうアルマだが、実際に会いに来てみればこうしてお茶をごちそうしてくれている。ユニはほっとしつつアルマの紅茶を飲みほした。

「ユニ。私といっしょにお店をやってみませんか？」

「？」

アルマはやわらかな笑みを口元にたたえたまま、手の中でカップを揺らせている。彼女が何を言い、何を考えているのかユニにはさっぱり分からなかった。

「ユニは小さくて可愛らしいから、きっとお客さんに人気が出ると思います。ユニも働いて自立できますし、この事務所もユニのおかげで今まで以上に繁盛する。おたがいにとって大きな得になるはずです。いえ、私よりもユニにとってのメリットの方が大きいはずです。なにしろユニは街に生まれたばかりで実績も信用も何も築いていないのに、いきなりこの事務所のバックアップを得られるわけですから」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3995v/>

黒猫と死にたがりのお嬢様

2011年10月10日10時34分発行